

<b>Title</b>	ニーバー兄弟とアメリカ
<b>Author(s)</b>	安酸, 敏眞
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 16(2): 61-91
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=159">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=159</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## ニーバー兄弟とアメリカ

安酸敏眞

The Niebuhr Brothers and America

Toshimasa YASUKATA

This paper intends to critically examine the significance and legacy of the Niebuhr brothers with special attention given to the American intellectual history of the twentieth century. I begin by tracing the career paths of that “tandem” formed by Reinhold and H. Richard Niebuhrs that towered in the middle third of the twentieth century. The survey of their intellectual pilgrimage and academic achievements is followed by consideration of their respective interpretations of American culture and history. For this purpose, Reinhold Niebuhr’s *The Irony of American History* (1952) and H. Richard Niebuhr’s *The Kingdom of God in America* (1937) are taken up for observation. Based on the analysis of their specific interpretations of American history as illustrated in these books, I venture, in the final section, to make a critical comparison of the thoughts of the Niebuhr brothers from the standpoint of my own. My inquiry will demonstrate the commonalities as well as major differences between the brothers.

### はじめに

本稿は、アメリカが生んだ二〇世紀最大の神学者として名高いニーバー兄弟の思想史的意義を、アメリカ文化ならびにアメリカ史との関わりにおいて考察しようとするものであり、これは別のところに寄稿した「H・リチャード・ニーバーのアメリカ文化論」のいわば続編ともいべき性格をもっている。今日、アメリカの思想界は混迷の度を深め、これまでアメリカの言論をリードしてきたキリスト教界においても、国家ならびに国民に確固たる方向性を与えるメッセージが語られない。ロバート・N・ベラーは『善い社会』のなかで、今日のアメリカには「宗教的洞察と道徳的説得を頼みとする、かつてのラインホルド・ニーバーのような『自認の指導者』」<sup>(1)</sup>が見出せないと述べている。そうであればこそ、ニーバー兄弟をいま一度読み直し、その精神的・思想的遺産から学ぶべきではなからうか。現代においてニーバー兄弟を再検討することは、それゆえ単なる好事家の手

Key words; American Intellectual History, Critical Comparison, H. Richard Niebuhr, Reinhold Niebuhr, Twentieth-Century America

慰み以上の意義を有しているであろう。

## 1. ラインホールドとリチャードのタンデムの軌跡

ラインホールド・ニーバー（Karl Paul Reinhold Niebuhr, 1892-1971）とH・リチャード・ニーバー（Helmut Richard Niebuhr, 1894-1962）は、ミズーリ州ライト・シティにドイツ移民一世の父と二世の母のもとに生まれ、ラインホールドが十歳のときに、父グスタフ（Gustav Niebuhr, 1863-1913）の転勤に伴い、イリノイ州リンカーン市に移り住んだ。彼らは自教派が経営するシカゴのエルムハースト・カレッジとセントルイスのイーデン神学校を卒業した後、東部の名門イエール大学の大学院で学び、のちに兄ラインホールドはニューヨークのユニオン神学校の、弟リチャードは母校イエール大学神学部の、ともにキリスト教倫理学の教授として活躍し、二〇世紀のアメリカ神学のみならず思想界全体に甚大な影響を及ぼした。

少年時代に家庭音楽会を催す際に、ラインホールドはトロンボーンを、リチャードはフルートを演奏したというが<sup>(2)</sup>、この二つの楽器が象徴しているように、ラインホールドは外向的で力強く、リチャードは繊細で内向的な性格であった。彼らにはフルダ（Hulda Niebuhr, 1889-1959）<sup>(3)</sup>という姉とウォルター（Walter Niebuhr, 1890-1946）という兄がいたが（次兄は生後間もなく亡くなった）、ウォルターは少年時代から父に反抗的であり、他の兄弟とは異なって父の衣鉢は継がず、実業家としてこの世で一定の成功を収めた。「聡明」にして「非常に精力的で熱っぽいタイプの人物」<sup>(4)</sup>であったラインホールドは、幼いときから父のお気に入りだったという。父に似て指導者タイプのラインホールドにとって、グスタフは見習うべき人生の先達のような存在であったが、母親に似て内気で控え目なりチャードにとって、父グスタフは怖い専制君主のような存在であったという<sup>(5)</sup>。人生の選択に関しても、ラインホールドは迷わず父の衣鉢を継いで牧師になる決意をしたが、リチャードは迷いに迷った末に聖職者ならびに神学者の道に進んだ。リチャードはつねに偉大な兄ラインホールドの後塵を拝し、彼が歩んだ道を後追いしながら勉学に励んだ。ラインホールドは煩瑣な「認識論」的議論に嫌気がさして（実際には「家庭の事情」のほうが大きかったと思われるが）イエール大学の修士課程で学業を終えたが<sup>(6)</sup>、リチャードは「アカデミックな放浪生活」(academic vagabondage)<sup>(7)</sup>を続けた末に、一九二四年イエール大学から博士号を取得した。

ラインホールドは、イエール大学で修士号を取得した後、一九一五年から一九二八年まで工業都市デトロイトで牧会生活に従事するが、この一三年間の牧会経験がのちに「ニーバー神学」と称される独自の思想形成のまさに原点を形づくる<sup>(8)</sup>。ラインホールドは「わたしの世界に衝撃を与えた十年間」という回顧記事において、次のように述懐している。

結論として、わたしが付け加えうる唯一の伝記的覚え書きは、今日わたしが抱いているよう

な神学的確信が、一大産業都市における牧師の職を務めている期間中に萌し始めたということである。それらがわたしに萌したのは、他の都市においてと同様、その都市において、わたし自身や他の人々によって説教された単純で取るに足りない道徳的説教が、一大産業中心地における生の残忍な事実にとって、完全に不適切であるように思われたからである。不適切であろうとなかろうと、それらはたしかに役に立たないものであった。それらは私的なこちよさを保ち、個人的な欲求不満を和らげるには当然役立ったのではあるが、集団的な振る舞いの問題における人間の行動ないし態度をこれっぽっちも変えはしなかった。

わたしが牧師の職にあったとき萌したこれらの確信は、神学校における教授の立場でさらに推敲されてきた。余暇がふえたことが、キリスト教思想の古典的時代の主要な思潮や強調を発見し、長い間無視されてきたが現代人にとって、あるいは実際あらゆる時代の人間にとって、依然として必要欠くべからざる洞察をそこに見いだす機会をわたしに与えたのである<sup>(9)</sup>。

この経験の中から生み出されたラインホルドの処女作が『文明は宗教を必要とするか?』*Does Civilization Need Religion?* (1927) であり、またこの牧会経験を記したものが『飼いならされた冷笑家のノートからの数頁』*Leaves from the Notebook of a Tamed Cynic* (1929) である<sup>(10)</sup>。前者は、多くのニーバー研究家が異口同音に指摘しているように<sup>(11)</sup>、トレルチの『キリスト教会と諸集団の社会教説』*Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen* の影響を色濃く反映しているが、実際、ラインホルドはデトロイト時代に、トレルチのこの浩瀚な書物をドイツ語原典で熱心に読み、そこから多くの教訓を学びとった。後年ラインホルドは、「どんな書物があなたの職業上の態度と人生哲学との形成に最も影響を及ぼしましたか」という『クリスチャン・センチュリー』誌の質問に答えて、トレルチの『社会教説』を真っ先に挙げている<sup>(12)</sup>。

デトロイトでの社会活動家としての活躍と処女作が評価されたことによって、ラインホルドは一九二八年、ニューヨークのユニオン神学校からキリスト教倫理学の助教授に招聘された。実践的科目の担当とはいえ、この人事はユニオン神学校においても異例の抜擢であった。しかし学長ヘンリー・S・コフィンの強い指導力のもとに、この人事は教授会ならびに理事会の反対もなくスムーズに進んだ。ユニオンに着任した一年後にはイェール大学神学部からキリスト教倫理学正教授の話がもたらされたため、大学側はラインホルドを引き留めるために「ウィリアム・E・ダッジ応用キリスト教教授職」(William E. Dodge Professorship of Applied Christianity) の席をわざわざ空けて彼に提供した<sup>(13)</sup>。こうしてラインホルドは、一九六〇年に退職するまで三十年以上にわたって、ユニオン神学校のこの「応用キリスト教」のポストにとどまった。このように、実践的活動の中からアカデミックな世界に足を踏み入れたラインホルドは、理論面での不足を補うために精力的に読書をし、単に実践的倫理学者としてだけでなく、キリスト教神学者としても稀に見る逸材である

## ニーバー兄弟とアメリカ

ことを証明し出した。一九三二年、彼が第四作目の単著として世に送った『道徳的人間と非道徳的社会』*Moral Man and Immoral Society*(1932)<sup>(14)</sup>は、アメリカの神学ならびにキリスト教がそれまで浸かりきっていた一九世紀的な樂觀主義を完膚なきまで批判し、カール・バルトに主導されたヨーロッパの弁証法的神学に対応する、アメリカの「新正統主義」の立場を確立する画期的な役割を果たした。それはまた、ラインホルドがそれまで共闘してきた「平和主義的なリベラルで社会主義的なサークルからの意識的な独立宣言」<sup>(15)</sup>でもあった。

さて、ここでもう一方のニーバー、すなわち弟のリチャードに目を転ずると、彼は一九一五年イーデン神学校を卒業すると、一年間郷里リンカーン市で兄ウォルターが経営する新聞社で一年間働いた後、一九一六年にセントルイスの教会の牧師となり、そこでワシントン大学に通いながら三年間牧会に従事した。一九一九年には母校イーデン神学校のスタッフに加わったが、ここでも神学校で教鞭をとる傍ら、夏期講座などを利用してコロンビア大学、ユニオン神学校、ミシガン大学、シカゴ大学などで自分の勉強を続けている。一九二二年には、かつて兄ラインホルドが学んだイエール大学神学部に入學し、一九二四年には「エルンスト・トレルチの宗教哲学」<sup>(16)</sup>に関する博士論文を完成して栄えある Ph.D. の学位を取得した。同年、弱冠三〇歳の若さでエルムハースト・カレッジの学長に就任すると、多方面の教育改革に精力的に着手し、正式なカレッジとしての認可獲得のために尽力した。一九二七年にはイーデン神学校に返り咲き、アカデミック・ディーンとして教派合同問題に粉骨努力した。一九二九年には処女作『デノミネーションリズムの社会的源泉』*The Social Sources of Denominationalism*(1929)を著して注目を浴び、これがきっかけとなって一九三一年の秋、母校イエール大学のキリスト教倫理の助教授として招聘される僥倖に恵まれた。かくしてリチャードも東部アカデミズムの仲間入りを果たした。

ラインホルドとリチャードは、アメリカの神学界ならびにキリスト教世界全体の活性化と洗練化のために、強力な信頼と協力の関係を結びつつ、それぞれ独自の仕方ですすめられた。人々は彼らのたぐい稀な美しい兄弟関係をしばしば「二頭立ての二輪馬車 (a tandem) に譬えて讚美した<sup>(17)</sup>。チャールズ・C・ブラウンは、二人のニーバーのもとで学んだ経験をもつ、ある尊敬されている学者の言葉として、次のような証言を紹介している。

ヘルムート・リチャードは、必ず最も礼儀正しい融和的な仕方ですすめられた彼の兄に言及したし、逆にラインホルドもヘルムート・リチャードに関してそうであった。相互的尊敬と正真正銘の兄弟愛 (Mutual respect and genuine brotherly love) は、公の場でも私的な場でも、彼らの関係の顕著な特徴であった<sup>(18)</sup>。

二人の薫陶を受けたこの学者が証言するように、たしかに彼らは終生深い信頼と愛情に結ばれていたが、しかし後述するように、二人の間に緊張関係や葛藤がまったくなかったわけではない。と

## ニーバー兄弟とアメリカ

もに自分のことを多くは語らなかった兄弟なので、実際のところ彼らがお互いをどのように見ていたかを正確に知るよしはないが、公開された書簡などから推してみても、特に弟リチャードの側に、偉大な兄に対する尊敬と嫉妬の入り混じった複雑な感情が潜んでいたことは否定できない。これは父グスタフによってリチャードの幼心に植えつけられたもので、自分はどんなに頑張っても兄ラインホルドにはかなわず、所詮は「セカンド・ベストであるという感情 (the feeling of being second-best) にほかならなかった。リチャードは生涯この感情に苛まれ、大学者としての名声を確立した後も、最後までそれと「闘わざるを得なかった」<sup>(19)</sup>。

ラインホルドは、長男ウォルターが牧師館とは無縁な実業家の道を歩み始めたために、父グスタフが一九一三年に亡くなった後は、いわば父になり代わって、母親や姉弟の面倒を見た。実際、弟リチャードがイエール大学で学ぶための学費を工面したのは彼であった<sup>(20)</sup>。そのみならず、ユニオン神学校に就職後、ラインホルドは当時パリにいて経済苦に喘いでいた兄ウォルターに、二年間にわたって年三〇〇〇ドルもの大金を送金している。そして一九三〇年、リチャードがイーデン神学校から八ヶ月の研究休暇を得たときには、二五〇ドルを弟のために工面して、リチャードのドイツでの神学研究を援助している。母リディアと姉フルダの生活も当然のごとく彼の肩に掛かっていた<sup>(21)</sup>。リチャードは在外研究の経済援助を受けた際に、この篤志家の兄に深く感謝して、次のような手紙をしたためている。

お送りくださった小切手は、何と二五〇ドルもの高額のものであります。それはドイツ、自分の偏狭性を脱却するチャンス、教育、兄弟愛、あなたのお陰を受けた少年時代と青年時代の思い出、信頼と信用を意味しています。センチメンタルになりたくはありませんが、わたしがそれについてどう感じているか、おわかりいただかなければなりません。でも、あなたが他の者たちのためにつねにやっておられることを、これまで誰もあなたのためにやってきてはいないので、おわかりにはなれないと思います……<sup>(22)</sup>。

こういう事情だったとすれば、リチャードが終生ラインホルドに深い感謝と恩義を感じていたことは容易に想像できるが、それだけに自らも名声を確立した後に、上記のようなアンビバレントな感情と闘わざるを得なかったことも頷けるところである。ラインホルドの妻アースラは、ニーバー一家の美しい親子関係・兄弟関係を紹介しながら、しかも彼女ならではの鋭い目で、かくも美しい兄弟愛に潜んでいた問題点を指摘している。「しかし人々はあなたが彼〔リチャード〕を手助けしたほど手助けされることを好むでしょうか？ 弟であり、あなたほど強健でもなく精神的でもなかった彼から、おそらくあなたは何かを取り去ったのではないのでしょうか？」<sup>(23)</sup>。

それはともあれ、ユニオンとイエールという東部の名門校の教授職に就いてからの二人の活躍振りには、あらためて説明するまでもない。大都会ニューヨークを活動の舞台としたラインホルドは、

## ニーバー兄弟とアメリカ

『一時代の終焉についての省察』 *Reflections on the End of an Era* (1934), 『キリスト教倫理の解釈』 *An Interpretation of Christian Ethics* (1935), 『悲劇を超えて』 *Beyond Tragedy* (1937), 『キリスト教と権力政治』 *Christianity and Power Politics* (1940), 『人間の本性と運命』 *The Nature and Destiny of Man* (1941-43), 『光の子と闇の子』 *Children of Light and Children of Darkness* (1944), 『時の徴を見分けて』 *Discerning the Signs of the Times* (1946), 『信仰と歴史』 *Faith and History* (1949), 『アメリカ史のアイロニー』 *The Irony of American History* (1952), 『キリスト教現実主義と政治的問題』 *Christian Realism and Political Problems* (1953), 『自我と歴史の対話』 *The Self and the Dramas of History* (1955), 『宗教的・世俗的アメリカ』 *Pious and Secular America* (1958), 『国家と帝国の構造』 *The Structure of Nations and Empires* (1959), 『人間の本性とその社会』 *Man's Nature and His Communities* (1965)などを次々に出版して、アメリカの言論界に不動の拠を築いた。戦争の足音が近づくと一九三九年には、英国エディンバラの有名なギフォード・レクチャーに講師として招かれ、一九四八年にはタイム誌の創刊二十五周年記念号の表紙を飾った。さらに一九六〇年には大統領メダルを受賞し、その名声は全世界に広まった。政治学者のハンス・モーゲンソーは、ラインホルド・ニーバーを「アメリカ現存の最大の政治哲学者、おそらくカルフーン以来のただ一人の創造的政治哲学者」<sup>(24)</sup>と見なしたし、歴史家のアーサー・シュレージンジャーは、「歴史の曖昧性」<sup>アンビギュイティ</sup>を鋭く洞察する彼のキリスト教現実主義を高く評価した<sup>(25)</sup>。一方、東部屈指の名門大学の一つである母校イエールにポストを得たりチャードは、カルフーンやベントンなどの錚々たるスタッフの仲間入りを果たし、充実した学生生活に打ち込んだ。その歩みは兄ラインホルドに比べればはるかに臆ではあったが、理論的な面では兄をはるかに凌ぐ業績を打ちたてた。イエール在職中に執筆された著作としては、『アメリカにおける神の国』 *The Kingdom of God in America* (1937), 『啓示の意味』 *The Meaning of Revelation* (1941), 『キリストと文化』 *Christ and Culture* (1951), 『徹底的唯一神主義と西洋文化』 *Radical Monotheism and Western Culture* (1960)だけであったが、いずれも珠玉の一品と呼べる作品である。遺作『責任を負う自己』 *The Responsible Self* (1963)は、亡くなった時点でほぼ完全な形で仕上がっていた作品であり、ニーバー倫理学・人間学の到達点を示すものとなっている。三、四十年の時を経て世に送り出された『地の信仰』 *Faith on Earth* (1989)と『神学、歴史、文化』 *Theology, History, and Culture* (1996)は、イエールでの講義やその他の教育機関で行われた各種講演を収録したもので、上記の著作を補完する重要な資料を含んでいる。

一九五二年、ラインホルドは長年の過労がたたって脳卒中に襲われ、それ以後左半身麻痺の状態に陥った。そういう状態にあっても彼は健筆を振るべく努力したが、明らかにこれ以後の彼の書いたものにはかつての精彩は見られなかった。それでも彼が生まれながらにして有していた生命力は、元来病弱であり精力的でなかった弟リチャードのそれよりはるかに強靱なものであった。一九六二年七月五日、リチャードが心臓麻痺で突然この世を去ったとき、誰がその死を予測し得た

## ニーバー兄弟とアメリカ

であろうか。ラインホルドにとっても、弟の死はまったく青天の霹靂であった。しかもそれはラインホルドの愛娘エリザベスの挙式の二日前のことであった。ラインホルドは予期せぬ訃報にひどく狼狽したが、彼が胸の内に覚えた激しい動揺にさらに追い打ちをかけたのは、イエール大学神学部のチャペルで準備されていた葬儀が、エリザベスの結婚式と同じ日の同じ時間帯に設定されていたことである。エリザベスは挙式を一週間延期することを父に申し出たが、ラインホルドは娘の門出に水を差したくなかった。こうして七月七日、リチャードの家族は葬儀に、ラインホルドの家族は結婚式に参列するという皮肉な巡り合わせとなった<sup>(26)</sup>。事情を知らないニーバー兄弟の友人や知人たちは、ラインホルドが愛弟の葬儀に参列しなかったことを訝しんだ。ラインホルドはくずおれそうになりながらも、愛娘の挙式を無事終えることができたことを神に感謝する一方で、弟の葬儀を欠席したことをひどく気にして、友人たちに欠席のお詫びをしたためた。以下に紹介するのは、長年の友人ウィリアム・スカーレット宛の手紙の一部である。

わたしの心は過去数日間ひどく動揺していました。それは最愛の兄弟を失ったからというだけではありません。彼はわたしの<sup>ガイド</sup>先達であり<sup>カウンセラー</sup>相談役でした。特にわたしが病気になって以来そうでした。それは彼の葬儀に出席することによって、彼の生涯にたいして公にわたしの感謝を述べることができなかったという事実によっています<sup>(27)</sup>。

リチャードよりも二歳年上のラインホルドは、リチャードがこの世を去った後もさらに九年生き続けた。六十年以上もタンデムを組んで支え合い、刺激しあってきた最愛の弟を失った後、自らも左半身麻痺の状態のラインホルドが、一体どのような気持ちで晩年の日々を過ごしたのか、いまのわれわれには知るよしもない。一九六九年の暮れから七〇年にかけて、ラインホルドの健康状態は悪化の一途を辿った。そして一九七一年六月一日、二〇世紀のアメリカ思想界に聳え立つ存在であったラインホルドは、マサチューセッツ州ストックブリッジの自宅で、妻アースラ、息子クリストファー、娘エリザベスに看取られながら、七十八年の波乱に富んだ生涯を閉じた。

以上、われわれはラインホルドとリチャードの稀有のタンデム関係に絞って、ニーバー兄弟の生の軌跡を大まかに辿ってみた。ドイツ移民の二世であったニーバー兄弟にとって、アメリカは自分たちがそこに生を享けた国として、生まれながらにして自分のアイデンティティの一部ではあったが、しかし彼らはドイツ文化との過去の絆を断ち切って、自らアメリカ人として生きる決断をしてアメリカ人となったという側面をもっている。アメリカ合衆国が長年の孤立化政策を捨てて第一次世界大戦に参戦したとき、彼らはドイツとアメリカとの間でどちらをとるかという選択を迫られたが、彼らはまた自分たちが選び取ったアメリカという国を、とりわけその宗教と文化の深層を問う仕方でも、たえず神学的ならびに文化哲学的省察の対象として対象化した。そこに「ニーバー兄弟とアメリカ」というテーマが成り立ちうる根拠がある。そこでわれわれは、ラインホルドとリ



チャードのそれぞれにおいて、アメリカがどのような仕方であられ、どのような問題を孕むものとして理解されているかを、まず見てみようと思う。

## 2. ラインホルド・ニーバーとアメリカ

アーネスト・W・ラフィーバーが編集したラインホルドの論文集に『世界危機とアメリカの責任』*The World Crisis and American Responsibility* (1958) という小著があるが、とりわけ三十年代後半以後のラインホルドの全活動は、この書名に暗示されているように、世界の中の大国としてのアメリカを対象として取り上げ、その政治的・倫理的責任をさまざまな角度から論ずることに向けられた。わけでも『アメリカ史のアイロニー』*The Irony of American History* (1952)、『宗教的・世俗的アメリカ』*Pious and Secular America* (1958)、アラン・ハイマートと共著の『そのように構想された国家』*A Nation So Conceived: Reflections on the History of America From its Early visions to its Present Power* (1963)<sup>28)</sup>などは、アメリカを真正面から論じており、われわれの主題にとって見逃すことができない。その中でも出色の出来映えは、何といても『アメリカ史のアイロニー』である。アメリカ歴史学会の会長を務めたこともあるヘンリー・F・メイは、この書に「深い感銘を覚え」、学生たちの必読書に指定して繰り返し読んだという。それが「流行はずれの書物」(an unfashionable book)となった六〇年代後半に、彼はあえて筆を執って書評を書いてすらいる<sup>29)</sup>。

この書の冒頭で、ニーバーは「悲哀」(pathos)、「悲劇」(tragedy)、「アイロニー」(irony)という三つの概念を取り上げ、それぞれを次のように定義している。(a)「悲哀は歴史的な状況において哀れみをもよおさせる要素であるが、賞賛に値するものでも、悔改めに導く保証をもつものでもない。悲哀は理由を与えることも、罪を帰せることもできないのに、人生の偶然の食い違いや混乱から起るものである。」(b)「人間の状況における悲劇的な要素とは、善をなそうとして悪を意識的に選ぶことである。人間や国家が善を目的としながら悪をなす場合、あるいはある高い責任を果すために罪にまみれ、あるいは高い価値をより高いか、それと同等の価値のために犠牲にする場合、悲劇的な選択をすることになる。」(c)「アイロニーは見たところ人生における偶然の不調和から起るが、より深く調べれば、単なる偶然だけでないことがわかる。不調和そのものは喜劇的なものである。それは笑いをもよおさせる。この喜劇の要素をアイロニーから完全に切り除くことはできない。しかしアイロニーは喜劇以上のものである。もし不調和の中に隠されているある関係が見つければ、喜劇的な状況はアイロニックな状況になる。」徳が内在している欠陥によって悪徳になる場合、力のある人や国家がその力に駆られて虚栄に走り、強さが弱さになる場合、安全性に過度の信頼においてそれが不安全に転化する場合、知恵が自らの限界を知らなかったために、愚かさへと変質する場合などは、すべてアイロニックな状況なのである。「アイロニックな状況が悲哀的なそれと異な

## ニーバー兄弟とアメリカ

るのは、そこに巻き込まれている人間が何らかの責任をもつからである。アイロニックな状況が悲劇から区別されるのは、その責任が意識的な決意よりはむしろ無意識的な弱さと関係しているからである」<sup>(30)</sup>。

このようにアイロニーの概念を規定した上で、ラインホールドは現代世界におけるアメリカの状況は、まさにアイロニーならびにアイロニックという形容がぴったり当てはまるとして、次のように述べる。

人間の歴史全体を人間の意志の支配下に置こうとするわれわれの夢は、どの理想主義者のグループにとっても、歴史のパターンを平和や正義という望ましい目標へ動かしていくのは容易でないという事実によって、アイロニカルにも反駁されてしまう。歴史というドラマの中に登場する強硬に抵抗する諸力は、われわれが測りうる以上に強力かつ執拗なものである。我が国はつねにブルジョワ文化の典型として潑刺たるシンボルであったが、最も強大になった今日、幼年時代よりも自分の欲することをなす力がなくなっている。幼児はより広い世界にいる大人よりも、自分の世界のなかではより安全である。歴史というドラマのパターンは、最も強力な人間や国家の力よりも、もっと急速に増大する。

われわれが直面している歴史的な挫折の経験は、二重の意味でアイロニックなものとなる。というのは、われわれが最も大切にしている希望に執拗に反抗する力は、われわれよりももっと単純な仕方で、人間の強さと弱さの曖昧さから逃げる道を見出せると考える、悪魔的な宗教・政治的信条によって供給されているからである。すなわち共産主義は、人間が歴史のある特定の瞬間において「必然の王国から自由の王国へ飛躍」できると信じている。共産主義の残酷さの一部分は、共産主義運動はこの飛躍の向こう側に立っているのであり、全歴史を自らの掌中に掴んでいるという、とんでもない装いから起こるものである<sup>(31)</sup>。

半世紀前まで、われわれは責任をもたなくてもよいところから来る <sup>イノセンス</sup>無邪気さをもっていたが、われわれは単に無邪気であったわけではない。われわれはまたわが国の運命を宗教的に解釈して、我が国の存在意義を人類史に新しい始まりを切り開こうとする神の御業と理解してきた。今やわれわれは世界的規模の責任の中に身を沈めている。そしてわれわれは弱小のものから強大なものへと成長してきた。われわれの文化は権力の用い方、濫用についてはほとんど知ることがない。けれどもわれわれは権力を隼的な規模で用いざるをえないのである。わが国の理想主義者たちは、われわれの魂の純潔を保持するために、権力に伴う責任を回避しようとする人々と、どんな手段であろうと良い目的のために行うのであれば、紛れもなく有徳なものであるにちがいないという血迷った主張をして、われわれの行為に含まれる善悪の曖昧さを覆い隠そうとしている人々に分裂している。われわれは、自分たちの文明を

## ニーバー兄弟とアメリカ

保持するために道徳的に危険な行動をとっているし、またとり続けねばならない。われわれは権力を行使しなければならない。しかしわれわれは一国家が権力を行使するのに完全に公平無私でありうると信じてはならないし、また特定の度合の利害や情熱が、権力の行使がそれによって正当化されるところの、正義を腐敗させるということに無頓着であってはならない。<sup>(32)</sup>

以上の抜粋のなかに、アメリカ史を解釈する際のラインホルドの基本的な構図がほぼ含まれている。『アメリカ史のアイロニー』は、第二次世界大戦後の冷戦構造の中で、まさに朝鮮戦争が勃発したその前後の国際情勢を背景にして書かれているので、今日のわれわれが読む場合には、著者が身を置いていた当時の状況を念頭に置く必要がある。ラインホルドによれば、アメリカが置かれた現状には多くのアイロニーの要素が含まれているという。アメリカは第二次世界大戦において悪しき勢力と闘わなければならなかったが、勝利を収めたものの原爆を落とした罪悪感はぬぐいきれなかった。公式には平和が訪れたが、戦時中の宣伝が約束していた消費者天国は実現できなかった。やがてソ連を中心として、武装した共産主義が台頭してきて、ヨーロッパにおいてもアジアにおいても急速に勢力を拡大してきた。アメリカはそれと対決したが、打ち負かすことはできなかった。こういう状況下で、アメリカは間違った二つの選択肢のいずれか一方に屈する危険性がある。ひとつは権力に伴う責任を一切放棄して、かつての無邪気な状態へと後退することである。もうひとつは究極的な勝利を達成するために、核戦争による人類の破滅も辞さないという強硬な路線である。しかしラインホルドによれば、無邪気な逃避も持続的勝利もともに不可能である。人間の歴史はどこまでも曖昧なものであり、歴史のうちで善と悪、美德と欠陥は複雑に結びついている。アメリカにしてもソ連にしても、本来は人類のための善と正義を代表するかたちで登場したはずなのに、いつしかその反対のものに変質する危険性を孕んでいる。人間や国家が有する最善の特質が彼らをして悪に導き入れるということは、これぞまさにアイロニカルな状況である。そこからラインホルドは、アメリカが世界と人類のために抱く使命感に潜む「傲慢<sup>アロガンス</sup>」と「自己満足<sup>コムプレイセンシー</sup>」の罪を厳しく戒める。なぜなら、アメリカの世界的使命感は一種のメシアニズム　ラインホルドによれば、「アメリカの精神には、その初期から現在にいたるまで、その深層にはメシア的な意識がある」<sup>(33)</sup>にほかならず、これは必ず自己満足と傲慢を生み出すからである。ここに宗教的な「謙遜のセンス」(a sense of humility)の重要性が強調される理由がある。

権力の行使の訓練、すなわち内部的な宗教的、道徳的抑制をつくるという第三の戦略は、普通は正義感の育成を意味するものと解釈されている。「各自のその分を与え」ようとすることは、実にそのような訓練の目的のひとつである。しかし国家というものは、個人よりもさらに、他者の権利や要求を十分に理解することができないものだ、ということをも認める謙遜の

## ニーバー兄弟とアメリカ

センスは、このような訓練においてはなおさら重要な要素であるかもしれない。正義を過信しすぎるとつねに不正義を招く……。人間や国家が「自らの訴訟の裁判官になる」かぎり、相手方の利害よりも自分自身の利害により敏感になってしまうという人間的弱点を必ずさらけ出すものである。それゆえ、いわゆる「正しい」人間や国家は、自らの道徳的偽善をあばかれるというアイロニーに容易に巻き込まれてしまう可能性がある<sup>(34)</sup>。

理想主義のレベルを超えた共同体の最も効果的な力は宗教的謙遜 (religious humility) である。これは、われわれを悩ませる他のグループや人々の虚栄が、われわれのなかにある似たような虚栄と、おそらく程度においては異なっている、質においては何ら異なっていないという寛容な認識を含むものである。それはまた、われわれの立場からあまりにも単純に理解しようとする、侵害してしまう他の生に潜む神秘性と偉大さを見極める宗教的センスをも含むものである<sup>(35)</sup>。

『アメリカ史のアイロニー』における細かい議論を論評する余裕はないが、上に紹介した抜粋からも容易に読み取れるように、この書において提示されるアメリカ史の解釈は、宗教家ないし神学者としてのラインホルドの深遠な人間観・歴史観を背景としている。例えば、のちにしばしば引用されることになった次のくだりは、彼の人間観・歴史観の精髓をよく示している。ここには「冷静を求める祈り」(Serenity Prayer)に通じるニーバー特有の敬虔さがにじみ出ている。

人生や歴史の中には、いかなる単純な調和<sup>コングレイティ</sup>もあり得ない。幸福への信仰<sup>カルト</sup>は、この調和<sup>コングレイティ</sup>を誤って仮定する。自然の気まぐれを科学によって征服することで、あるいは歴史の不正義に対して社会的、政治的に勝利したりすることで、人生の不調和<sup>インコングレイティ</sup>を無限に緩和することは可能である。しかしこのような戦略はすべて、人間存在の断片的性格を最終的に克服することはできない。人生の究極的な知恵は、不調和<sup>インコングレイティ</sup>を取り除くことをではなく、不調和<sup>インコングレイティ</sup>の中にあってそれを超える平静さ (sincerity) を達成することを要求する。

なす価値のあるいかなることも、われわれの一生のうちに達成することはできない。それゆえ、われわれは希望によって救われなくてはならない。真なるもの、美なるもの、善なるものも何ひとつ、歴史の直接的脈絡において完全に意味をなすことはない。それゆえ、われわれは信仰によって救われなくてはならない。いかに有徳であろうとも、われわれのなすことは、単独では達成することができない。それゆえ、われわれは愛によって救われるのである。いかなる有徳的な行為も、われわれの友や敵の見地をすれば、われわれの見地を越えるほどには有徳的とはいえない。それゆえ、われわれは赦しという愛の究極のかたちによって救われなければならない<sup>(36)</sup>。

ラインホルドのアメリカ史解釈には、「キリスト教信仰についてのカルヴァン主義的解釈とジェファースンの解釈の相違」<sup>(37)</sup>とか、「ピューリタニズムからヤンキーイズムへの頹落」(the descend from Puritanism to Yankeeism)<sup>(38)</sup>とか、さらには「敬虔と世俗主義の相互滲透」(the interpenetration of piety and secularism)<sup>(39)</sup>といった興味深い視点が多く含まれているが、ここでそれらを考察する余裕はない。しかし『アメリカ史のアイロニー』が専門の歴史家たちに与えた影響の大きさは、この節の冒頭で紹介したヘンリー・F・メイによってだけでなく、リチャード・ライニッツの『アイロニーと意識 アメリカの歴史編纂とラインホルド・ニーバーのヴィジョン』によっても窺い知ることができる。彼によれば、「アメリカの歴史記述においてニーバー的なアイロニーの使用が増加していることは、アメリカの歴史意識の成熟を示すものであり、われわれの過去に対するより批判的な態度を表している」<sup>(40)</sup>という。

### 3. H・リチャード・ニーバーとアメリカ

ラインホルドが直接的に「文化の改革」(the reform of culture)を目指したのに対して、リチャードは「教会の改革」(the reformation of the church)に使命感を感じていたので<sup>(41)</sup>、彼はラインホルドと違って、(若干の例外を除いて)アメリカ国家やアメリカ文化そのものを対象とはしなかった。むしろ彼はアメリカのキリスト教と教会を直接的な考察の対象として立て、それを独自の視点から分析・解釈した。二人の兄弟の気質の違いはこのように学問のスタイルにも表れている。それはともあれ、こういう次第でリチャードのアメリカ文化論は、具体的にはアメリカ・キリスト教史の解釈という仕方で遂行される。しかしそれは単なるキリスト教史や教会史にとどまらず、アメリカ文化全体を問い直す鋭い視点と問題提起を含むものである。彼のアメリカ史の見方は、処女作『デノミネーションナリズムの社会的源泉』*The Social Sources of Denominationalism* (1929)と二作目の『アメリカにおける神の国』*The Kingdom of God in America* (1937)に典型的に示されている。リチャードはラインホルド同様、専門の歴史家であったわけではないが、「天賦の才に恵まれた社会学の素人」として、また「天賦の才に恵まれた歴史学の素人」<sup>(42)</sup>として、アメリカ教会史の研究に比類なき貢献をした。

『デノミネーションナリズムの社会的源泉』は、<sup>デノミネーション</sup>教派論に関する古典的著作と見なされているが、これはウェーバーやトレルチの宗教社会学的類型論を援用しながら、アメリカのプロテスタント・キリスト教の教派的多様性を社会学的に分析したものである。この書においてリチャードは、合従連衡を繰り返すアメリカ型キリスト教のダイナミズムのなかに、一定のメカニズムを見だし、そこからアメリカ宗教の共通のパターンを認識している。

リチャードは、アメリカのキリスト教の大半がヨーロッパではもともと「廢嫡者の教会」(the

## ニーバー兄弟とアメリカ

churches of the disinherited) であった事実から説き起こし、かつては既存の教会から迫害された少数派グループが、時の経過とともに既成教会へと発展していった経緯と、逆に既成教会化して信仰が形骸化したとき、本来の純粋な福音的信仰に立ち返ろうとして新たな教団形成が起こるさまを、鮮やかに描き出す。要するに、これは《教会》からの《分派》の分離と、《分派》の《教会》への展開という二重の運動であるが、リチャードはトレルチから学んだ理論をアメリカ宗教に応用して、そこから「教派主義」(denominationalism) というアメリカ独自の現象を説明したわけである。

リチャードによれば、アメリカで <sup>デノミネーション</sup> 教派型キリスト教が誕生した要因の一部は、諸教会のヨーロッパでの歴史に遡るが、しかしアメリカで栄えている諸教派の大半は合衆国で産声を上げたものであり、アメリカという新しい環境に内在していた社会的諸力の影響下で、現在の独立した個性を持つにいたったのである。リチャードはアメリカのキリスト教の教派分裂の最大要因として、(1)「地域主義」(sectionalism)、(2)「移民がもたらす異質性」(the heterogeneity of an immigrant population)、(3)「際立った違いをもつ二つの人種の存在」(the presence of two distinct races) を挙げている<sup>(43)</sup>。

アメリカにおける教会の分裂は、経済史・政治史の基礎になっている東・西・南・北といった地方的組織のパターンにしたがって形づくられている。その場合、東西南北は地理上の区分であると同時に、文化的・経済的・社会的相違を表現するものである。この連関で特に重要なのはフロンティアの存在である。一八・一九世紀を通じて、アメリカ社会は絶えず西方に向かって前進していったが、フロンティアは宗教を含めたアメリカ文化全般に深い刻印を残すことになった。すなわち西部フロンティアは、独自の経済生活・経済理論の型と政治的慣例・政策を生み出し、特有の宗教体験・宗教表現をみ出した。そしてそこに生まれた西部固有の教派は、ヨーロッパの伝統の名残をとどめた東部の既成社会における宗教生活の形式としばしば抗争した。このように、地域的特殊性と西進するフロンティアが多様な教派を生み出す第一の要因であった。

第二の要因は移民である。ヨーロッパからアメリカに移住してきた数百万人の移民の集団は、人種・民族・言語・宗教においてさまざまであり、彼らは宗教組織を含む文化的多様性をアメリカに持ち込んだ。そして新しい関係性の中で適応と抗争を経験しながら、その教会生活の性格を大幅に変えていった。移民の諸教派には大きく二つの傾向が見てとれ、一方はアメリカの既成の宗教的態度と実践に一致し適合しようとするが、他方はヨーロッパで有していた固有の性格を保持・発展させようとする。つまり「順応」(accommodation) と「分化」(differentiation) という二つの傾向である<sup>(44)</sup>。

第三の要因は「人種の境界線」(the color line)<sup>(45)</sup> という問題である。奴隷として連れてこられたアフリカ系移民とその子孫たちは、白人中心のアメリカ社会においては、奴隷解放後も隷属的地位に貶められ、白人キリスト者と黒人キリスト者が完全な交わりをもつことはきわめて稀である。一般的には、「文化水準が社会全体に共有されているものに近づいていくにつれて、多くの場合、もともとは階級的差異を原因として分裂した諸教会が合同へと向かう序曲となる。しかし、黒人の文化

的興隆は、その教会と以前の主人たちの教会との統一を希望する気運をほとんど産まない<sup>(46)</sup>。

このように、本書においてリチャードは、アメリカのキリスト教の教派主義的あり方を擁護ではなく、むしろ厳しく糾弾している。彼はここでは「デノミネーションナリズム」(denominationalism) という用語を全面的に軽蔑的に用いている。教派<sup>デノミネーションナリズム</sup>性とは、リチャードにしたがえば、「キリスト教の道徳的失敗」(the moral failure of Christianity) を表現したものにほかならず、教派<sup>デノミネーション</sup>は「教会に対するこの世の勝利」(the victory of the world over the church) と「キリスト教の世俗化」(the secularization of Christianity) との象徴である。「教派は教会の福音が非難している、あの分裂を教会が承認したということの象徴なのである」<sup>(47)</sup>。

さて、アメリカのキリスト教諸教派の成立を人種、階級、地域的利害などの社会学的要因によって説明した処女作はかなりの好評を博したが、著者には多くの点で不満が残ったという。リチャードが言うには、自分が採用した社会学的アプローチは、アメリカのキリスト教が特殊な教派<sup>デノミネーション</sup>という水路に流れ込む事実を説明しても、アメリカ宗教の躍動的な力そのもの、その運動のまさに原動力を説明するものではなかったというのである。そこで彼は数年後に「アメリカのキリスト教についての新たな研究」に取り組み、その成果を『アメリカにおける神の国』*The Kingdom of God in America* (1937) に纏めた。この著作は「アメリカ宗教のまさしく古典的な解釈」<sup>(48)</sup>と見なされるもので、ラインホルドも最も影響を受けた書物のひとつとして挙げたほどの逸品である。この書はリチャード自身の神学形成を見る上でも決定的に重要な意義をもっている<sup>(49)</sup>。というのは、やがて彼が確立する「徹底的唯一神主義」(radical monotheism) や「神学的相対主義」(theological relativism) の思想は、この書において剔抉された「神の主権性」(the sovereignty of God) という観念に基づいているからである。

『アメリカにおける神の国』におけるリチャードの根本テーゼは、「アメリカのキリスト教とアメリカ文化は、主権を有する、生ける、愛する神への信仰に基づくことなしには、全くもって理解され得ない」<sup>(50)</sup> ということである。しかし彼の見るところでは、「神の国」といっても決して一義的ではなく、アメリカ教会史における大別された三つの時期に応じて、それぞれ異なった意味合いを帯びているという。すなわち、アメリカの基礎が据えられた初期には、「神の国」の観念は「神の主権性」(the sovereignty of God) を意味し、大覚醒と福音主義的な信仰復興の時期には、「キリストの統治」(reign of Christ) を、そして近時になってはじめて「地上における王国」(kingdom on earth) を意味している。しかしこれらは単に三つの異なった観念ではなく、相互に密接に関連しあっており、アメリカにおける「神の国」の思想は、そのうちのひとつだけによっては表現され得ないという<sup>(51)</sup>。

リチャードによれば、アメリカのキリスト教の源泉である一六世紀の宗教改革は「神の現在のな主権性と主導権を新たに主張した」<sup>(52)</sup> 運動であり、この新しい神信仰の根本的原理は「預言者のな神の国の観念」(the prophetic idea of the kingdom of God)<sup>(53)</sup> である。それゆえ、カトリック的な「見

神」(visio dei)に代わって、宗教改革に淵源するプロテスタントイズムでは、「神の王国」(regnum dei)が強調される<sup>54)</sup>。すなわち「神が唯一の支配者であることを告白し、神の王国への忠誠を宣言すること」(the confession of the sole rulership of God and the declaration of loyalty to his kingdom)<sup>55)</sup>こそが重要なのである。ピルグリム・ファーザーズ以後、アメリカに渡ったプロテスタント・キリスト教は、ヨーロッパにおけるように「批判」(criticism)や「抗議」(protest)を特徴とする運動から、「建設」(construction)を目指す運動へと転換した。かくしてアメリカは「建設的プロテスタントイズムの実験」(an experiment in constructive Protestantism)の舞台となったのである<sup>56)</sup>。

リチャードによれば、「神の国の観念は、今日それが主導的な観念であるように、アメリカの発展の最初の時期においても支配的であった」。しかし初期のプロテスタント信徒たちは「神の国を理想主義的かつユートピア的な仕方では考えなかった」<sup>57)</sup>。「一七世紀のプロテスタント信徒たちは、言葉の一般的な意味ではユートピア主義者でも理想主義者でもあり得なかった」<sup>58)</sup>。彼らの信じる神の国は、「建造されるべき、あるいは樹立されるべきものでも、外から世界のうちにやってくるものでもなかった。むしろそれは永遠の昔にすでに樹立されており、この世に蔓延る反抗にもかかわらず、服従される必要のある支配」<sup>59)</sup>を意味した。「神的主権性という根本的確信」から生じたのは、「キリスト教的立憲主義」(Christian constitutionalism)、「教会の独立」(the independence of the church)、「人間的主権性の制限ないし相対化」(the limitation or relativization of human sovereignty)という三つの原理である<sup>60)</sup>。この連関において語られる、「神への依存の換位命題は、神ならざるすべてのものからの独立である」(The converse of dependence on God is independence of everything less than God)<sup>61)</sup>という言説は、のちの「徹底的唯一神主義」を予感させるものである。

アメリカにおける「神の国」の第二の要素は、「イエス・キリストにおいて、隠れた王国が説得力のある仕方で啓示されただけでなく、人々の間で特別な新しい歩みを開始したという確信」<sup>62)</sup>である。「キリストの王国の観念」(the idea of the kingdom of Christ)は、アメリカの宗教発展の第一の時期には二次的なものにとどまっていたが、教会の「制度化が進んだ期間の後に、神の国に対するダイナミックな信仰が、大覚醒と一連の信仰復興運動において再び自己主張しとき、支配的な観念となった」<sup>63)</sup>。ジョナサン・エドワーズにおいては、「再生への信仰は神的主権性を有する实在へのこの上なき確信にしっかりと基礎づけられて」おり、「神的主権性への信仰はキリストの王国の明確な基礎であった」<sup>64)</sup>が、信仰復興運動者たちはキリストの王国ということをやより力説した。彼らにとっても、神の主権性はキリストの王国の大前提の基礎ではあったが、彼らは「キリストの統治は何よりも人間のところに宿る知識を支配するものである」<sup>65)</sup>として、キリストによってもたらされる恵みと再生を力説した。

一九世紀後半から顕著になった神の国の地上への到来という傾向は、プロテスタント・キリスト教の最初期には強くはなかった。千年王国主義的なグループも存在はしたが、一般的にピューリタンたちの間では、個人主義的・霊性主義的な他界観が支配的であった。しかし神の審判と救済につ



いての社会的・現世主義的観念を含む旧約聖書が正典の一部である以上、社会的・現世主義的な救済の観念は避けて通れないものであった。アメリカのキリスト教は千年王国的傾向を少なからず有しているが、これはカルヴィニズムや急進的宗教改革に起因するというより、むしろ大覚醒や信仰復興運動の間接的影響であると言えなくもない。

けれども大覚醒と信仰復興運動が、何よりもそれ〔千年王国的傾向〕をアメリカのキリスト者たちの共通のきわめて重要な所有物としたように思われる。彼らは遠くにあった可能性を非常に近いものにしたのである。アメリカ的信仰のうちに来るべき神の国の観念が成立したことは、外部から、すなわち、合理主義や政治的理想主義から、導入されたものに起因するのではない。それは神的主権性の確信とともに始まり、そこからキリストの王国の実現に導かれ、いまやキリストの王国が人間の永遠の希望の実現へと至るのを明確に見てとる、あのキリスト教的運動の中から成立したのであった<sup>(66)</sup>。

かくして、「一七世紀が〔神の〕主権性の世紀であり、一八世紀がキリストの王国の時代であったとすれば、一九世紀は来るべき神の国の時代と呼ばれうるかもしれない<sup>(67)</sup>」とリチャードは言う。これはいささか図式的すぎる捉え方と言えなくもないが、しかしリチャードによれば、アメリカのキリスト教に内包されていた問題性は一九世紀になって顕在化してくるという。

来るべき神の国の希望は、この時代に多くの誇張や歪曲を被った。それは主権性に対する信仰や恵みの経験といった文脈から切り離されることによって<sup>セキュラライズ</sup>世俗化されたが、他方では人間的主権性や自然的自由といった観念と結びつけられた。それは<sup>ナショナルイズ</sup>国粹主義化され、国家的優越性や明確な運命といった感情を支持するために利用された。それは産業主義や資本主義の進歩と混同された。それはミラーの信奉者たちによって悲劇的にも字義通りに受け取られた。それは英国危機の時代においてと同様、戦争と暴力を正当化するために用いられた。しかしこうした常軌を逸した形態の希望ですら、それがアメリカのキリスト者たちの精神に対して及ぼした威力をさし示していた<sup>(68)</sup>。

アメリカのキリスト教は一九世紀後半以降、ますます「天上の至福を待望することに背を向け、地上の生活が徹底的に変革されることを希望するようになった<sup>(69)</sup>」。かくして「社会的福音」(the social gospel)の運動が展開する土壌が出来上がったが、ナイーヴなオプティミズムに立脚するリベラルなキリスト教は、本来の福音主義信仰からの深刻な逸脱という側面も持っていることは否定しがたい。リチャードはこのようなキリスト教に対して痛烈な批判を浴びせている。すなわち、「怒りのない神は、罪のない人間を、十字架ぬきのキリストの奉仕によって、審判のない御国に入れた」

(A God without wrath brought men without sin into a kingdom without judgment through the ministrations of a Christ without a cross)<sup>(70)</sup> というのである。

このようにリチャードは、「神の国」の観念の三つのヴァリエーションを軸にしてアメリカのキリスト教を捉えるのであるが、『アメリカにおける神の国』において剔抉された「神の主権性」(the sovereignty of God)の観念は、リチャードにとって根本的な神学的重要性を獲得することになる<sup>(71)</sup>。すなわち、彼は『啓示の意味』(1941)、『キリストと文化』(1951)と研究を深めていって、ついには『徹底的唯一神主義と西洋文化』(1960)を書き上げるが、そこにおいて彼は自らの文化神学理念である「徹底的唯一神主義」(radical monotheism)を確立するにいたるのである。

#### 4. ラインホルドとリチャードの思想的相違点

これまでの考察からもわかるように、ラインホルドとリチャードの間には、単に気質や中心的関心事に関してのみならず、思想の内実においても意義深い深い相違があることが予感される。二人の間の思想的相違は、ある意味では『アメリカ史のアイロニー』と『アメリカにおける神の国』の底流に潜む相違といってもよい。もちろんこの相違は、タンデムを組む兄弟の間の相違であって、大局的に見た場合には、共通の陣営内部におけるヴァリエーションにすぎないともいえる。にもかかわらず、ラインホルドとリチャードの思想的相違は、キリスト教思想の根幹に関わる重要な問題を暗示しているように思われる<sup>(72)</sup>。そこで次に、ニーバー兄弟の思想の深層に潜む意義深い相違をいくつかの資料に基づきながら、独自の視点から分析してみようと思う。

ラインホルドとリチャードが公の場で激しく論争し合ったのはただの一度きりで、それは一九三二年の『クリスチャン・センチュリー』誌においてのことであった。その前年の九月、日本軍は中国東部の満州を侵略し、北京を本拠とする中国政府の脅威となった。いわゆる満州事変の勃発である。アメリカを含む西欧列強は、この地域全体の安定を脅かす危機的事態に直面して、軍事的介入をすべきか、経済制裁にとどめるべきか、それとも不介入を決め込むべきかの決断を迫られた。このような状況において、リチャードは「非行動の恵み」(The Grace of Doing Nothing)という論文を書いて、アメリカは太平洋を隔てた満州の事件に介入すべきではないと主張した。これに対して、ラインホルドは「われわれは非行動であるべきか？」(Must We Do Nothing?)という論文を發表して弟に応酬し、アメリカはある強制力をもって日本の軍事侵略に制裁を加えるべきだと説いた。しかしリチャードは自説を譲らず、さらに「神の国へ至る唯一の道」(The Only Way into the Kingdom of God)という論文を寄稿して、ラインホルドとの対立点をより明確にした<sup>(73)</sup>。この論争は時局的な政治問題に関するものであり、またこれについては掘り下げた研究もすでに存在するので、われわれはここでこの論争に深入りはしないが、ここには二人の宗教性、倫理性、さらに歴史観に関わる微妙ながらも根本的な相違が表面化している<sup>(74)</sup>。

しかし『クリスチャン・センチュリー』誌でのこの論争を除けば、二人がお互いの著作や思想を公に論評し合うことはほとんどなかったようである。唯一の例外と言えるものは、リチャードがラインホルドの歴史解釈を論評したもので、これは一番最近出版されたリチャード・ニーバーの『神学、歴史、文化』*Theology, History, and Culture* (1996)の中に収録されている<sup>(75)</sup>。これはもともとラインホルドの『信仰と歴史』*Faith and History* (1949)の出版直後に、「神学的ディスカッション・グループ」(これはR・ベイントン、ジョン・C・ベネット、ロバート・L・キアルフーン、G・ハーケネス、フランシス・P・ミラー、W・パウク、P・ティリッヒ、ヘンリー・P・ヴァン・デュッセン、ニーバー兄弟といった錚々たるメンバーを含む研究会であった)の会合で口頭発表されたものであるが、リチャードは「大いなる躊躇」をもってこの発表を行っている。彼がラインホルドの思想を論評するのをためらう一番の理由は、著者と評者が幼年時代以来特別な関係におかれてきた兄弟同士だからにほかならない。すなわち評者リチャードにとって、著者「ライニー」は「歴史的な、しかし部分的にしか覚えていない幼年時代以来、ヒーローであり、友であり、仕事仲間であり、兄弟関係にあるライバルであり、神学的な好対照であり、あらゆる危機に際して頼るべき人であり、そこから独立を勝ちとる必要があった人物であった」<sup>(76)</sup>のである。それに加えて、リチャードによれば、「ライニーの思想は四分の三かそれ以上が水面下に沈んでいる氷山のようなもので、そこでは明確に述べられていることは明確化されていないことに基づいている」<sup>(77)</sup>という。こうしたことが的確な批評を困難にする。

このような理由から、「ためらいがちな冒険」(the hesitant venture)としてのこの論評は、しかしながらリチャードのラインホルドに対する留保点をよく表している。二人の考えが一番異なる点は、歴史における神の善性に関してである。リチャードが後に確立する「徹底的唯一神主義」(radical monotheism)のモットーは、「わたしは主でありあなたの神である。あなたはわたしの前に何もかも神としてはならない」(I am the Lord thy God; thou shalt have no other gods before me)と「存在するものはすべて、善である」(Whatever is, is good)<sup>(78)</sup>というものであるが、リチャードのこの立場からすれば、ラインホルドの歴史観は神の善性をネガティブに捉えるすぎる傾向がある。つまりラインホルドは、歴史のうちにはそれ自体において善なるものはひとつも存在しない、ということを強調しすぎる。例えばラインホルドは、「道徳的審判は歴史のうちで実行されるが、決して正確にはない」とか、「有徳的者たちや罪のない者たちは、人生と歴史の競争においては、まさしくその徳ゆえに、より少なくではなくむしろ多く苦しむかもしれないし、しばしば実際に苦しむ」とか、「歴史のうちには……道徳的意味の接線は存在するが、明確かつ精密なパターンは存在しない」<sup>(79)</sup>と主張する。しかしリチャードによれば、これは神が「隠れた神」(Deus Absconditus)であるかぎりにおいては正しいが、神が「啓示された神」(Deus Revelatus)であるとすれば正しくない。歴史は神の審判であるだけでなく、神による赦しと変革の業をも反映したものである。ラインホルドはキリストの復活によって現実のものとなった、歴史のうちでの神の現在的な救済

## ニーバー兄弟とアメリカ

の働きに、十分な配慮を払っていない。自分としては、ラインホルドの歴史の神学のネガティブな言説の基礎にある「ポジティブな神学」を伺ってみたい<sup>(80)</sup>。以上がリチャードのラインホルドに対する根本的な批判である。

われわれが注目するもうひとつの資料は、リチャードの『キリストと文化』におけるラインホルドへの言及箇所である。リチャードの著作の中では最も有名なこの書は、「ライニー」に献げられているが、ここでリチャードは脚注で三度ラインホルドに言及している。最初の二回は、イエスの徳目を愛（love）として捉える宗教的自由主義、特に『キリスト教の本質』におけるハルナックの見方に関連しており、ここでは「この徳目を拡大して見せるのは、自由主義者だけではない。例えば、ラインホルド・ニーバーは、愛をイエスの倫理の鍵と見ることに於いてハルナックと同調する」と述べられている。引き合いに出されているラインホルドの文献は、『キリスト教倫理の解釈』*An Interpretation of Christian Ethics* (1935) である<sup>(81)</sup>。もうひとつの言及箇所は、「矛盾におけるキリストと文化」(Christ and Culture in Paradox) の一例としてトレルチについて論じた直後に、「われわれの時代には、二元論的解決の多くの版<sup>バージョン</sup>が流布している」と述べ、それについての脚注として、「並列主義 (parallelism)、あるいは道德生活における小区画化 (compartmentalization)、を避ける二元論の中では、ラインホルド・ニーバー『道德的人間と非道德的社会』(1932年)や、A.D. リンゼイ『二つの道德 神に対するわれわれの義務と社会に対するわれわれの義務』(1940年)が挙げられるであろう」と記されている<sup>(82)</sup>。

われわれが見るところでは、前者はラインホルドの自由主義神学的傾向を暗に批判しており、後者はラインホルドを「矛盾におけるキリストと文化」の類型に属する「二元論者」(dualist)とした上で、しかもトレルチに対してと同様、一定の肯定的な評価を表明した発言とひとまず受け取れるであろう。しかし神学的リベラリズムに対するニーバー兄弟の関係と、「キリストと文化」に関する五類型の問題は、実際にはそれほど単純ではない。そこでこの二点に関して、もう少し突っ込んで考察してみよう。

一般的には、ラインホルドの『道德的人間と非道德的社会』は、カール・バルトの『ローマ書講解』がヨーロッパの自由主義神学に対して果たしたのと類似した役割を、一九三〇年代のアメリカにおいて果たした、と言われている。しかしリチャードの目から見ると、ラインホルドは神学的リベラリズムをまだ十分には克服しておらず、この点がリチャードから見たラインホルドの一番の問題点であった。リチャード・W・フォックスによって明るみにもたらされたリチャードの書簡は、例えば、次のような辛辣きわまりない批判を含むものである。

あなたは宗教を力として考えておられます。 ときには危険であるが、ときには役に立つ力として。それはリベラルです。宗教そのものにとって、宗教は力ではなく、宗教が向けられているところのもの、つまり神こそが力なのです。……わたしはリベラルな宗教は徹底的

## ニーバー兄弟とアメリカ

に悪であると考えています。それは偽善を癒す応急手当のようなものです。それは善意を高めたもの、つまり道徳的理想主義です。それが崇める神の特質は、「第n度にまで引き上げられた人間的特質」にほかならず、わたしはかかる宗教からはあなたのように多くを期待いたしません。それはセンチメンタルでありロマンティックなものです<sup>(83)</sup>。

ここでリチャードは、ラインホルドの宗教の捉え方はリベラルであるとして、これを厳しく糾弾しているわけであるが、伝記記者フォックスによれば、弟のこのような批判にもかかわらず、ラインホルドは「つねにリベラルな近代主義的クリスチャンであり、ハルナックやトレルチというドイツのリベラル神学者たちの真の相続人であった」<sup>(84)</sup>という。ところで、それではリチャードとリベラリズムとの関係はどうかといえ、同じくフォックスの見るところでは、「H・リチャード・ニーバーは、人間本性と人間の歴史の捉え方においては、確固として反リベラルであった」が、「しかしリチャードの社会的ならびに政治的保守主義は、徹底的な知的リベラリズムと奇妙な仕方で結びついていた」<sup>(85)</sup>。すなわち、ラインホルドとリチャードを比較した場合、政治的ならびに社会的問題に関するかぎり、ラインホルドの方がはるかにリベラルであり、リチャードは反リベラルないし保守的であるが、知的生活においてはリチャードの方がラインホルド以上にリベラルだという一面があるのである。したがって、ニーバー兄弟とリベラリズムの伝統との関係は、今後さらに究明されなければならない課題である。

次に、「キリストと文化」に関する五類型の問題であるが、この類型論そのものは実に悩ましい問題を含んでいる。しかし、これについてはJ・H・ヨーダー、D・M・イーガー、G・H・スタッセンによる本格的な研究があるので、詳細はそれに譲ることにしたい<sup>(86)</sup>。ここではリチャードの類型論にさまざまな問題や曖昧さがあることを承知の上で、あえてこの類型論を援用して、リチャードとラインホルドの関係を考察してみよう。上に記したように、『キリストと文化』においては、ラインホルドは婉曲的な仕方で第四類型「矛盾におけるキリストと文化」に位置づけられている、と考えることができる。それでは当のリチャードはといえば、明言されてはいないが、彼が第五類型「文化の変革者キリスト」(Christ the Transformer of Culture)、つまり「回心主義者」(conversionist) 類型に属することは、今日ではほとんど自明のごとく見なされている<sup>(87)</sup>。それゆえ、ラインホルドとリチャードの相違は、第四類型と第五類型の相違にほぼパラレルであるといえるであろう。

こう考えると、『神学、歴史、文化』の編者ウィリアム・ステイシー・ジョンソンの次の注釈はきわめて示唆に富むものであるといえよう。

H・リチャード・ニーバーが「二元論」を批判したときはいつも、彼は通常ラインホルドのことを念頭に置いていた。リチャードの思考にとって、道徳的ならびに歴史的な「逆説」<sup>パラドックス</sup>

## ニーバー兄弟とアメリカ

に訴えるラインホルドの二元論的アピールは、この世への黙従とこの世との妥協とを不可避的にもたらずものであった。ラインホルドは不完全な仕方でのみ実現される「理想」をもって歴史にアプローチしたが、これに対してリチャードは、責任倫理と神はいたるところで働いているという確信をもち続けた。リチャードは歴史のうちで働く神の活動を現在の瞬間に探し求めた。ラインホルドはむしろ歴史がその光のもとで裁かれる超越性の原理として神を考えた。彼らの間の相違にとって中心的であったのは、彼らのそれぞれの歴史観であった<sup>(88)</sup>。

かくして、われわれはキリスト教と文化、福音と世界という問題群に対する二人の取り組み方を規定している、彼らの歴史観における微妙にして根本的な相違へと再度立ち返らされることになる。二人の歴史観の相違は、『アメリカ史のアイロニー』と『アメリカにおける神の国』を比較したときに、最もよく示されというのがわれわれの主張であるが、それでは具体的にどこがちがうのであろうか。ラインホルドはアイロニーという概念を手がかりにしてアメリカ史を解釈するわけであるが、彼がオーテス・ケーリによる「日本語版へのまえがき」で述べているように、この鍵概念の趣旨は「神は高ぶるものを拒ぎ、へりくだる者に恩恵を与え給う」という聖句（ペテロ前書五章五節、ヤコブ書四章六節）に最もよく表現されている。ラインホルド自身の説明を引用すれば、

或る意味で私が期待するのは……キリスト教信仰の枠組のなかでの理解への貢献なのである。聖書の信仰は、その面前ではもろもろの国びとといえども「桶のひとしづくのごとく」にすぎない神の威厳について、また「もろもろの君をなくならしめ、地の審士<sup>さばきびと</sup>をむなしくせしむ」る神の裁きについて知っている。この威厳を知ることによってのみ、私自身の国アメリカのように強大となった国々のプライドをへりくだらすことができるのだと私は考える。それ故私は、今見るような世俗的な諸傾向にもかかわらず、この宗教的明察力とでもいうべきものが、わが国の文化にみなぎりゆくことを望むのである。さもなければわれわれは見掛けの成功によって堪えがたいプライドにおちいり、かくてわれわれの究極的な敗北への基礎を置くであろうことを私は確信する。これこそまさに「皮肉的」なのです。別の言葉でいえば、われわれの聖書の信仰は個人のいのちと裁きにつながりを持つと同様、国家のいのちと裁きにもつながりを持つと私は信じる<sup>(89)</sup>。

ここに明確に示されているように、ラインホルドの歴史観の究極的な基礎は聖書の信仰であり、神の絶対的な主権性への信仰である。「神の主権性」(the sovereignty of God)を歴史解釈の鍵概念とするリチャードと、それゆえこの点では共通している。しかしラインホルドの場合には、旧約聖書の・預言者的な「歴史を支配する神」という観念がより強烈で、人間の高ぶりとプライド、そ

れに対する神の裁き，という側面が圧倒的に優勢を占めている。リチャードが兄の歴史観を評して，「キリスト教以前の終末論的歴史観」(a pre-Christian eschatological view of history)<sup>(90)</sup>と呼ぶゆえんである。

これとは対照的に，リチャードは「イエス・キリストを通して，神に対する勝利的な信仰 (triumphant faith) がこの世にもたらされたという事実」に力点を置き，したがって「キリスト教的歴史観における復活の位置」を重視する<sup>(91)</sup>。『アメリカにおける神の国』の表現を使えば，単なる「神の主権性」の観念ではなく，「キリストの統治」(reign of Christ)と「地上における王国」(kingdom on earth)という他の二要素をも併せ持つ，「神の国」がリチャードの歴史観の中心を占めている。わけでも，「キリストの王国の観念」，すなわち「イエス・キリストにおいて，隠れた王国が説得力のある仕方で啓示されただけでなく，人々の間で特別な新しい歩みを開始したという確信」<sup>(92)</sup>がリチャードにおいては決定的意義を有している，と言ってよからう。ラインホルドが旧約の預言者アモスを愛好するのに対して，リチャードがジョナサン・エドワーズをしばしば引証するのは，二人の歴史観の相違を端的に象徴してはいないだろうか<sup>(93)</sup>。

このこととまんざら無関係でないと思われるのは，ラインホルドとリチャードにおける「変革」(transform; transformation)の概念の相違である。『キリストと文化』の類型論に依拠すると，「変革」のモチーフは第五類型の専売特許のように思われるが，果たしてそうであろうか。第四類型の「矛盾におけるキリストと文化」にも，それとは違った形の「変革」のモチーフがあるのではなからうか。例えば，この類型に属すると見なされているトレルチには独自の「形成」(Gestaltung)の理論があったし<sup>(94)</sup>，ラインホルドの有名な「冷静を求める祈り」<sup>(95)</sup>には「変える勇氣」(courage to change)<sup>(96)</sup>への言及が含まれている。それゆえ，ラインホルドにおいてももちろん，リチャードとは違った意味で「文化の変革者キリスト」ということが言えるのではなからうか。例えばラインホルドは処女作『文明は宗教を必要とするか?』において，「世界超越と世界変革」(Transcending and Transforming the World)<sup>(97)</sup>について語っている。彼の考えにしたがえば，「世界超越」の契機が逆説的に「世界変革」を可能にするのである。だからこそ，ラインホルドは「矛盾におけるキリストと文化」(Christ and Culture in Paradox)の類型に属するとも言えるわけであるが，いずれにせよわれわれが強調したいのは，「回心主義者」ならざる「二元論者」にもそれなりの「変革」のモチーフとスタイルが存在するということである。

ついでながら，ラインホルドとの比較で興味深いのは，リチャードも，処女作『デノミネーションナリズムの社会的源泉』の最終章において，キリスト教が社会ないし世界の分裂状態を「変革」(transform)し「超越」(transcend)すべきことを力説していることである<sup>(98)</sup>。しかしリチャードの用語法はラインホルドとは全く異なる。ラインホルドにおいては，世界超越とは「他界的」(other-worldly)な契機，つまり内在に対する対立概念としての超越を指している。これに対してリチャードのいう「超越」とは「超克」し「乗り越え」ること，つまり overcoming とほぼ同義であ

る。だが、この超克を可能にする力はどこから来るのだろうか。ラインホールドならおそらく「彼岸から！」と答えるであろう。トレルチもかつて「彼岸は此岸の力である（Das Jenseits ist die Kraft des Diesseits）<sup>(99)</sup>」という有名な言葉を残した。しかしリチャードの場合には、内在と超越という二元論的図式はまさに超克されており、彼岸はイエス・キリストを通して此岸の力としてすでにアクチュアルなものとなっている。彼にとって、神は人間に内在するもろもろの限界を改変するために、いま現に働いているのであり、イエス・キリストは神と人間との間の仲保である。歴史はあらゆる存在の構造である神によって内部から変革されつつある。リチャードが「キリスト教信仰は生の全機構においてここでいま深甚な効果を生じなければならない<sup>(100)</sup>」と言うのは、彼のこのような徹底的唯一神主義信仰の立場からすれば当然であろう。

### むすびにかえて

以上、われわれはニーバー兄弟の思想と業績を、ラインホールドとリチャードの微妙な相違に注意を払いながら、特にアメリカ文化ならびにアメリカ史との関係において考察してきた。すでに紙数は尽きているのでそろそろ筆を擱かなければならないが、最後にわれわれが問わなければならないのは、ニーバー兄弟はアメリカにとっていかなる存在であり、アメリカの歴史に対していかなる意義を有していたかということである。かつてハンス・モーゲンソーは、ラインホールド・ニーバーは「あたかも外から、つまり永遠の相のもとに（sub specie aeternitatis）アメリカを眺めることのできる人間」であったと述べたが<sup>(101)</sup>、同様のことはリチャードについても言えるであろう。マーティン・E・マーティーによれば、中西部出身のドイツ移民二世のリチャード・ニーバーは、アメリカの主流派の「稀少な種類のインサイダー」（rare kind of insider）であって、彼は「なかばインサイド内側に、なかばアウトサイド外側に立っていた。それゆえ彼はより大きな共同体に聴く耳をもっていたとともに、それに対して何かを語る見込みを有していた<sup>(102)</sup>」。若き日に貧しい移民の二世として苦勞した彼は（ラインホールドも同様であるが）、アメリカ文化の「インサイダー」でもあり「アウトサイダー」でもあった。したがって、ニーバー兄弟はアメリカの宗教文化を内側からだけでなく、外側からも理解することができた。本稿でも考察したように、リチャードは独自の神学研究とアメリカ史研究を通して、神の絶対的な主権性という視点のもとに、宗教を含む人間文化の営みを相対化して解釈する「徹底的唯一神主義」の立場に到達した。かくして、のちに「現代の預言者」と呼ばれたラインホールドについては言うまでもなく、リチャードもいわば「永遠の相のもとに」アメリカ文化を見る視点を自家薬籠中のものとしていた<sup>(103)</sup>。

そのような「眼識」（discernment）<sup>(104)</sup>をもった稀有の思想家として、ニーバー兄弟 わけてもラインホールドは、「高くそびえ立つ人物」（a towering figure）<sup>(105)</sup>と呼ばれるに相応しい風貌と内実を兼ね備えていた は、二〇世紀中葉にまさに高くそびえ立つタンデムを形成し、それぞれが独自



## ニーバー兄弟とアメリカ

の仕方ではアメリカ国民を啓蒙し、アメリカ文化を神学的に考察する方法を開拓した。一九九〇年秋の『ライフ』誌は、「二〇世紀の最も重要な一〇〇人のアメリカ人」(The 100 Most Important Americans of the 20th Century)の一人にラインホルド・ニーバーを取り上げ、「不完全な社会から徳を要求した」神学者として紹介している<sup>(106)</sup>。二一世紀になってアメリカが迷走し始めている現在、ニーバー兄弟の精神的・思想的遺産を再検討することは重要な課題であるといえるであろう<sup>(107)</sup>。

### 注

- (1) ロバート・N・ペラー他, 中村圭志訳『善い社会』みすず書房, 2000年, 196-197頁。
- (2) これはリチャードの教え子で長年の同僚でもあったリストン・ポープが伝えている逸話であるが、その際に両親や他の兄弟がどういう楽器を演奏したのか、詳しいことはわからない。Liston Pope, "H. Richard Niebuhr: A Personal Appreciation," *Faith and Ethics: The Theology of H. Richard Niebuhr*, ed. Paul Ramsey (New York: Harper & Row, 1957; reprint, Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1977), 4-5.
- (3) フルダは遠回りし苦学の末、遅蒔きながらシカゴのマコーミック神学校の教授になった。著書には、*Ventures in Dramatics with Boys and Girls of the Church School* (New York: Charles Scribner's Sons, 1935), *Greatness Passing By: Stories to Tell to Boys and Girls* (New York: Charles Scribner's Sons, 1947), *The One Story* (Philadelphia: The Westminster Press, 1949) がある。彼女の生涯と思想については、Elizabeth F. Caldwell, *A Mysterious Mantle: The Biography of Hulda Niebuhr* (New York: Pilgrim Press, 1992) が詳しい。
- (4) かつての恩師であったロバート・C・スタンジャーによるラインホルド評。Charles C. Brown, *Niebuhr and His Age: Reinhold Niebuhr's Prophetic Role in the Twentieth Century* (Philadelphia: Trinity Press International, 1992), 14.
- (5) Richard Fox, *A Biography of Reinhold Niebuhr* (New York: Pantheon Books, 1985), 11.
- (6) Cf. Reinhold Niebuhr, "Intellectual Autobiography" in *Reinhold Niebuhr: His Religious, Social, and Political Thought*, ed. Charles W. Kegley, 2d ed., rev. and enl. (New York: The Pilgrim Press, 1984), 4.
- (7) Cf. Reinhold Niebuhr, "On Academic Vagabondage," first published in *Keryx* in 1924; reprinted in *Young Reinhold Niebuhr: His Early Writings*, ed. William G. Chrystal (New York: The Pilgrim Press, 1977), 145-150.
- (8) 例えば、ハンス・ホーフマンは「ニーバーの神学の積み荷全体は、彼が第一次世界大戦中および大戦後のデトロイトで、若き牧師として遭遇した社会問題の深さに対する彼の驚きから成長した」と述べているし (Hans Hofmann, *The Theology of Reinhold Niebuhr* [New York: Charles Scribner's Sons, 1956], 3), ネイサン・A・スコット・Jr. は「彼の人生の最初の偉大な形成的経験はデトロイトにおける数年間(一九一五 - 一九二八年)に起こった」(Nathan A. Scott, Jr., *Reinhold Niebuhr* [Minneapolis: University of Minnesota Press, 1963], 9) と記している。
- (9) Reinhold Niebuhr, "Ten Years That Shook My World," in *The Christian Century* LVI (April 26, 1939), 545.
- (10) Reinhold Niebuhr, *Does Civilization Need Religion?: A Study of the Social Resources and Limitations of Religion in Modern Life* (New York: The Macmillan Company, 1927); Reinhold Niebuhr, *Leaves from the Notebook of a Tamed Cynic* (New York: Willett, Clark, and Company, 1929). 前者は出版の翌年にはいち早く日本語に翻訳されて、栗原基訳『近代文明と基督教』(イデア書院, 1928年)として出版されている。後者は出版後四十年以上も経ってはじめて、古屋安雄訳『教会と社会の間で牧会ノート』(新教出版社, 1971年)として我が国の読者の読むところとなった。
- (11) 例え、Ronald H. Stone, *Professor Reinhold Niebuhr: A Mentor to the Twentieth Century* (Louisville, Kentucky: Westminster/John Knox Press, 1992), 41, 48; Brown, *Niebuhr and His Age*, 32, 43.

## ニーバー兄弟とアメリカ

- (12) Reinhold Niebuhr, "Ex Libris," in *The Christian Century* LXXIX (May 9, 1962), 601. ちなみに、彼が挙げている五冊の書物を順に記すと、トレルチ『キリスト教会と諸集団の社会教説』、アウグスティヌス『神の国』、ウィリアム・テンブル『自然、人間、そして神』、H・リチャード・ニーバー『アメリカにおける神の国』、カール・バルト『ローマ書講解』となっている。ついでながら、リチャードもトレルチのこの書を最も影響を受けた十冊の書物の一つに挙げている。H. Richard Niebuhr, "Ex Libris," in *The Christian Century* LXXIX (June 13, 1962), 754.
- (13) Cf. Robert T. Handy, *A History of Union Theological Seminary in New York* (New York: Columbia University Press, 1987), 174-175; Fox, *A Biography of Reinhold Niebuhr*; 105, 117-118.
- (14) リチャード・フォックスによれば、『道徳的人間と非道徳的社会』というこの表題は、トレルチからとられたものであるというが ( Cf. Fox, *A Biography of Reinhold Niebuhr*; 134 ), トレルチ研究者の筆者もその正確な典拠を寡聞にして知らない。しかし遺稿となった英国講演の一つ「倫理学と歴史哲学」の中には、実質的にそれを支持するような、個人的道徳と集団的倫理との相違に関する鋭い分析が示されていることはたしかである。Cf. Ernst Troeltsch, "Ethik und Geschichtsphilosophie," in *Der Historismus und seine Überwindung*, ed. Friedrich von Hügel (Berlin: Pan Verlag Rolf Heise, 1924), 12-13.
- (15) Fox, *A Biography of Reinhold Niebuhr*; 136.
- (16) H. Richard Niebuhr, "Ernst Troeltsch's Philosophy of Religion," (Ph.D. diss., Yale University, 1924); available on University Microfilms, Ann Arbor, Mich..
- (17) Cf. Martin E. Marty, introduction to the Wesleyan Edition of *The Kingdom of God in America*, by H. Richard Niebuhr (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1988), xii.
- (18) Brown, *Niebuhr and His Age*, 160.
- (19) Fox, *A Biography of Reinhold Niebuhr*; 122.
- (20) Cf. *Remembering Reinhold Niebuhr: Letters of Reinhold & Ursula M. Niebuhr*; ed. Ursula M. Niebuhr (San Francisco: HarperSanFrancisco, 1991), 415.
- (21) Fox, *A Biography of Reinhold Niebuhr*; 118, 122.
- (22) H. Richard Niebuhr to Reinhold Niebuhr of February 14, 1930; cited in *A Biography of Reinhold Niebuhr* by Fox, 122.
- (23) *Remembering Reinhold Niebuhr*; 415.
- (24) Hans Morgenthau, "The Influence of Reinhold Niebuhr in American Political Life and Thought," in *Reinhold Niebuhr: A Prophetic Voice in our Time, Essays in Tribute by Paul Tillich, John C. Bennett and Hans Morgenthau*, ed. Harold R. Landon (Cambridge: Seabury Press, 1962), 97-116; モーゲンソーによるこのニーバー評の翻訳は、大木英夫『終末論的考察』(中央公論社、1970年)の巻末に付録として収録されている。
- (25) Cf. Arthur Schlesinger, Jr., "Reinhold Niebuhr's Role in American Political Thought and Life," in *Reinhold Niebuhr: His Religious, Social, and Political Thought*, 190-222.
- (26) こうした事情を考慮すると、「また、これは多少、衝撃的な事実であるが、ライニーは、弟リチャードの亡くなったとき、イエール大学のチャペルでの葬儀に出席しなかった。それは、ライニーの娘エリザベスの結婚式の当日であったのであるが、娘の『延期しましょうか』という提案を押さえて、その日に結婚式をし、それがあつた理由でイエールに行かず、関係者を驚かせたのである」という東方敬信の叙述は、事実を正確に伝えたものとは言い難い。われわれがのちに詳しく分析するように、ラインホルドとリチャードの間には神学的見解や時局の判断に関する微妙な相違があり、また感情的な対立もないではなかったが、ラインホルドがリチャードの葬儀に参列しなかったのは、そういうことに原因があるのではなく、あくまでも当時の彼の健康状態と周囲の事情がそれをかぎりなく不可能にしたのである。東方敬信「二人のニーバー」、キリスト教文化学会編『キリスト教と欧米文化』(ヨルダン社、1997年)、217頁参照。
- (27) Reinhold Niebuhr to Scarlett, n.d. [1962], July; Fox, *A Biography of Reinhold Niebuhr*; 280.

## ニーバー兄弟とアメリカ

- (28) この書名はリンカーンのゲティスバーグ演説の冒頭の、「八十七年前、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、すべての人は平等につくられているとう信条に献げられた、新しい国家を、この大陸に打ち建てました」( Fourscore and seven years ago our fathers brought forth on this continent a new nation, conceived in liberty and dedicated to the proposition that all men are created equal )を背景としており、ここにはアメリカの初期から現代にいたるまでの歩みを、自由と平等という建国の精神に照らして、トータルに問う姿勢が見られる。
- (29) Henry F. May, "A Meditation on an Unfashionable Book," in *Ideas, Faiths & Feelings: Essays on American Intellectual & Religious History 1952-1982* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1983), 220-225.
- (30) Reinhold Niebuhr, *The Irony of American History* (New York: Charles Scribner's Sons, 1952), vii-viii. この書にはオーテス・ケーリ訳『アメリカ史の皮肉』(社会思想研究会出版部, 1954年)と大木英夫・深井智朗訳『アメリカ史のアイロニー』(聖学院大学出版会, 2002年)の二つの翻訳があるが、それぞれ一長一短あるので、本書からの引用は両書を参考にしつつも、すべて原典に基づいて自分で訳したものである。
- (31) Ibid., 2-3.
- (32) Ibid., 4-5.
- (33) Ibid., 69.
- (34) Ibid., 138-139.
- (35) Ibid., 139.
- (36) Ibid., 62-63.
- (37) Ibid., 46.
- (38) Ibid., 52; cf. Reinhold Niebuhr, *Pious and Secular America* (New York: Charles Scribner's Sons, 1958), 11.
- (39) *Pious and Secular America*, 11.
- (40) Richard Reinitz, *Irony and Consciousness: American Historiography and Reinhold Niebuhr's Vision* (London and Toronto: Bucknell University Press, 1980), 12.
- (41) Niebuhr, H. Richard, "Reformation: Continuing Imperative," in *How My Mind Has Changed*, ed., with an introduction by Harold E. Fey (New York: World Publishing Company, 1960), 69-80, especially 74-75; originally published in *Christian Century* LXXVII (1960), 248-251.
- (42) Martin E. Marty, introduction to the Wesleyan Edition of *The Kingdom of God in America*, xii-xiii.
- (43) H. Richard Niebuhr, *The Social Sources of Denominationalism* (New York: Henry Holt and Company, 1929; reprint, New York: The New American Library, 1957), 135. 邦訳は柴田史子訳『アメリカ型キリスト教の社会学的起源』(ヨルダン社, 1984年), 128頁。
- (44) Ibid., 203. ディーフエンサーラーによれば、「自らの移民教会については、リチャード・ニーバーの目標は同化 (assimilation) であった」。Diefenthaler, *H. Richard Niebuhr*, 13.
- (45) Ibid., 236. 邦訳『アメリカ型キリスト教の社会的起源』, 214頁。
- (46) Ibid., 262-263. 邦訳『アメリカ型キリスト教の社会的起源』, 236頁。
- (47) *The Social Sources of Denominationalism*, 25. 邦訳『アメリカ型キリスト教の社会的起源』, 31頁。
- (48) Marty, "Introduction to the Wesleyan Edition," vii.
- (49) ニーバーの著作のうちドイツ語に翻訳されているのは、*Der Gedanke des Gottesreichs im amerikanischen Christentum*, trans. Richard M. Honig (New York: Church World Service, 1948) と *Radikaler Monotheismus. Theologie des Glaubens in einer pluralistischen Welt*, trans. Franziska Weidner (G 受 ersloh: Gert Mohn, 1965) だけであるが、その一冊が『アメリカにおける神の国』であることは、この書の重要性を示唆している。
- (50) H. Richard Niebuhr, *The Kingdom of God in America*, xvi.
- (51) Ibid., xii.

- (52) Ibid., 17.
- (53) Ibid., 18.
- (54) Ibid., 19-20.
- (55) Ibid., 24.
- (56) Ibid., 43.
- (57) Ibid., 45-46.
- (58) Ibid., 49.
- (59) Ibid., 56.
- (60) Ibid., 58.
- (61) Ibid., 69.
- (62) Ibid., 88.
- (63) Ibid., 99.
- (64) Ibid., 101.
- (65) Ibid., 105.
- (66) Ibid., 143.
- (67) Ibid., 150.
- (68) Ibid., 151.
- (69) Ibid.
- (70) Ibid., 193.
- (71) リチャードによれば、「『神の主権性』という古い神学的語句は、わたしにとって根本的であるところのものを示している。』 H. Richard Niebuhr, "Reformation: Continuing Imperative," in *Christian Century* LXXVII (March 2, 1960), 248.  
 なお、リチャード・ニーバーの思想全体を「神の主権性」という視点から解釈したものに、グレン・H・スタッセンのすぐれた博士論文がある。Glen Harold Stassen, "The Sovereignty of God in the Theological Ethics of H. Richard Niebuhr" (Ph.D. diss., Duke University, 1967).
- (72) ニーバー兄弟の思想を、人間学、神学、倫理の分野にわたって広範囲に比較した研究としては、トーマス・R・マクファウルの博士論文がある。彼はラインホルドとリチャードの「共通性と相違」(commonalities and differences)を多角的に検証している。彼によれば、両者の思惟の最も基本的な相違は、ラインホルドが「特殊なものから普遍的なものへと進む」のに対して、リチャードは「普遍的なものから特殊なものへと進む」ことであるという。Cf. Thomas Ray McFaul, "A Comparison of the Ethics of H. Richard Niebuhr and Reinhold Niebuhr" (Ph.D. diss., Boston University, 1972)
- (73) H. Richard Niebuhr, "The Grace of Doing Nothing," in *The Christian Century* (March 23, 1932), 378-380; Reinhold Niebuhr, "Must We Do Nothing?," in *The Christian Century* (March 30, 1932), 415-417; H. Richard Niebuhr, "The Only Way into the Kingdom of God," in *The Christian Century* (April 6, 1932), 447. 三論文とも現在では *The Christian Century Reader* (Freeport, New York: Books for Libraries Press, 1972), 216-231 に再録されている。
- (74) この論争に関しては、John D. Barbour, "Niebuhr Versus Niebuhr: The Tragic Nature of History," in *The Christian Century* (November 21, 1984), 1096-1099 と東方敬信「歴史と霊性 ニーバー兄弟の論争をめぐって」『日本の神学』第二四号(1985年), 18-34頁を参照したが、特に後者はニーバー兄弟の相違の中核に迫る秀逸な論文である。
- (75) H. Richard Niebuhr, "Reinhold Niebuhr's Interpretation of History," in *Theology, History, and Culture*, 91-101.
- (76) Ibid., 91.
- (77) Ibid., 97.
- (78) H. Richard Niebuhr, *Radical Monotheism and Western Culture*, with supplementary essays (New York: Harper & Row, 1960), 37.

## ニーバー兄弟とアメリカ

- (79) Reinhold Niebuhr, *Faith and History* (New York: Charles Scribner's Sons, 1949), 129, 131, 132.
- (80) H. Richard Niebuhr, "Reinhold Niebuhr's Interpretation of History," 100.
- (81) H. Richard Niebuhr, *Christ and Culture* (New York: Harper & Row, 1951), 15, 17.
- (82) *Ibid.*, 183.
- (83) H. Richard Niebuhr to Reinhold Niebuhr, n.d. [fall, 1932], quoted in Fox, *A Biography of Reinhold Niebuhr*, 145.
- (84) *Ibid.*, 146; cf., 134.
- (85) Richard Wightman Fox, "The Niebuhr Brothers and the Liberal Protestant Heritage," in *Religion & Twentieth-Century American Intellectual Life*, ed. Michael J. Lacey (Cambridge: Cambridge University Press, 1991), 104.
- (86) Glen H. Stassen, D.M. Yeager, and John Howard Yoder, *Authentic Transformation: A New Vision of Christ and Culture* (Nashville: Abingdon Press, 1996).
- (87) Cf. Hans F. Frei, "The Theology of H. Richard Niebuhr," in *Faith and Ethics: The Theology of H. Richard Niebuhr*, ed. Paul Ramsey (New York: Harper & Row, 1957; reprint, Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1977), 65; John D. Godsey, *The Promise of H. Richard Niebuhr* (Philadelphia: J.B. Lippincott Company, 1970), 62-63; Lonnie Kliever, *H. Richard Niebuhr* (Waco, Texas: Word Books, 1977), 58.
- (88) William Stacy Johnson, Introduction to *Theology, History, and Culture*, xxvi.
- (89) オーテス・ケーリ訳『アメリカ史の皮肉』(社会思想研究会出版部, 1954年) 2 - 3頁の「日本語へのまえがき」より。
- (90) H. Richard Niebuhr, "Reinhold Niebuhr's Interpretation of History," 97.
- (91) *Ibid.*, 99.
- (92) H. Richard Niebuhr, *The Kingdom of God in America*, 88.
- (93) ラインホルドは、普遍史に関する最初の明示的な説明をアモス書九章七節の審判の言葉の中に見いだしているが、そのことが暗示しているように、イスラエルの最初の偉大な記述預言者アモスは、ラインホルドが最も愛好する預言者であった。Cf. Reinhold Niebuhr, *The Nature and Destiny of Man*, vol. II (New York: Charles Scribner's Sons, 1943), 23; *Faith and History*, 107 n.2.
- なお、リチャードのジョナサン・エドワーズに対する言及としては、H. Richard Niebuhr, *The Kingdom of God in America*, 101, 103, 106, 113-114, 116, 136-139; "The Anachronism of Jonathan Edwards," in *Theology, History, and Culture*, 123-133.
- (94) これについては、拙著 *Ernst Troeltsch: Systematic Theologian of Radical Historicality* (Atlanta: Scholars Press, 1986) ならびに近藤勝彦『トレルチ研究』上・下巻(教文館, 1996年)参照。
- (95) ラインホルド・ニーバーの「冷静を求める祈り」に関しては、一昨年、愛娘エリザベスによる興味深い書物が出版された。英語版 *The Serenity Prayer: Faith and Politics in Times of Peace and War* も近々出る予定である。Cf. Elisabeth Sifton, *Das Gelassenheits-Gebet*, trans. Hartmut von Hentig (München: Carl Hanser Verlag, 2001).
- (96) 「変える勇氣」(courage to change) がラインホルドにとって本質的意義を有していたことは、J・ビンガムがこれをラインホルドの伝記の表題に選んだことからよくわかる。June Bingham, *Courage to Change* (New York: Charles Scribner's Sons, 1961).
- (97) Reinhold Niebuhr, *Does Civilization Need Religion?*, 165.
- (98) H. Richard Niebuhr, *The Social Sources of Denominationalism*, 264, 265, 280, 281, 284.
- (99) Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen* (Tübingen: J.C.B. Mohr, 1912), 979.
- (100) H. Richard Niebuhr, "Reflections on the Christian Theory of History," in *Theology, History, and Culture*, 90 (傍点筆者)。
- (101) Hans Morgenthau, "The Influence of Reinhold Niebuhr in American Political Life and Thought," 109; 大木英夫『終末論的考察』(中央公論社, 1970年), 216頁。

## ニーバー兄弟とアメリカ

- (102) Martin E. Marty, introduction to the Wesleyan Edition of *The Kingdom of God in America*, xii.
- (103) マーティン・E・マーティーによれば、リチャードは物事の本質を直観するというゲーテ的な意味で、アメリカ精神とその歴史を「眺める」(schauen) ことができた。Ibid. xiii.
- (104) Ibid., xvi.
- (105) Nathan A. Scott, Jr., "Introduction," in *The Legacy of Reinhold Niebuhr*; ed. Nathan Scott, Jr. (Chicago: The University of Chicago Press, 1975), ix.
- (106) *Life* (Fall 1990), volume 13, number 12, 12.
- (107) ニーバー兄弟の精神的・思想的遺産を再検討しようとする試みは、これまでに何度かなされてきている。前出の *The Legacy of Reinhold Niebuhr* や *Reinhold Niebuhr and the Issues of Our Time*, edited and introduced by Richard Harries (Grand Rapid, Mich.: William B. Eerdmans Publishing Company, 1986), あるいは *The Legacy of H. Richard Niebuhr*; ed. Ronald F. Thieman (Minneapolis: Fortress Press, 1991) などがそうであるが、しかしニーバー兄弟の精神的・思想的遺産を同時に、しかも対等の比重で扱ったものは、トーマス・R・マクファウルの未出版の博士論文(注72)くらいなもので、それ以外は寡聞にして知らない。本稿でも参照した Richard Wightman Fox, "The Niebuhr Brothers and the Liberal Protestant Heritage," in *Religion & Twentieth-Century American Intellectual Life*, ed. Michael J. Lacey (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) は、ニーバー兄弟の思想の比較への第一歩となるものであろうが、如何せんまだごく限られた一面しか取り扱っていない。

## 参考文献

- Barbour, John D. "Niebuhr Versus Niebuhr: The Tragic Nature of History." *The Christian Century* (November 21, 1984): 1096-1099.
- 口バートン・N・ベラー他, 中村圭志訳『善い社会』みすず書房, 2000.
- Bingham, June. *Courage to Change*. New York: Charles Scribner's Sons, 1961.
- Brown, Charles C. *Niebuhr and His Age: Reinhold Niebuhr's Prophetic Role in the Twentieth Century*. Philadelphia: Trinity Press International, 1992.
- Caldwell, Elizabeth F. *A Mysterious Mantle: The Biography of Hulda Niebuhr*. New York: Pilgrim Press, 1992.
- Chrystal, William G. *A Father's Mantle: The Legacy of Gustav Niebuhr*. With a foreword by Richard R. Niebuhr. New York: The Pilgrim Press, 1982.
- Chrystal, William G., ed. *Young Reinhold Niebuhr: His Early Writings, 1911-1931*. With a foreword by John C. Bennett. New York: The Pilgrim Press, 1977.
- Diefenthaler, Jon. *H. Richard Niebuhr: A Lifetime Reflections on the Church and the World*. Macon, Georgia: Mercer University Press, 1986.
- Fey, Harold E. and Margaret Frakes., ed. *The Christian Century Reader: Representative Articles, Editorials, and Poems Selected from More than Fifty Years of The Christian Century*. Freeport, New York: Books for Libraries Press, 1972.
- Fowler, James W. *To See the Kingdom: The Theological Vision of H. Richard Niebuhr*. Nashville: Abingdon Press, Reprint, Lanham, MD: University Press of America, 1985.
- Fox, Richard Wightman. *A Biography of Reinhold Niebuhr*. New York: Pantheon Books, 1985.
- Fox, Richard Wightman. "The Niebuhr Brothers and the Liberal Protestant Heritage." In *Religion & Twentieth-Century American Intellectual Life*, ed. Michael J. Lacey, 94-115. Cambridge: Cambridge University Press, 1991.
- Frei, Hans F. "The Theology of H. Richard Niebuhr." In *Faith and Ethics: The Theology of H. Richard Niebuhr*; ed. Paul Ramsey, 65-116. New York: Harper & Row, 1957. Reprint, Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1977.
- Godsey, John D. *The Promise of H. Richard Niebuhr*. Philadelphia: J.B. Lippincott Company, 1970.

## ニーバー兄弟とアメリカ

- Handy, Robert T. *A History of Union Theological Seminary in New York*. New York: Columbia University Press, 1987.
- Harries, Richard, ed. *Reinhold Niebuhr and the Issues of Our Time*. Grand Rapid, Mich.: William B. Eerdmans Publishing Company, 1986.
- Hofmann, Hans. *The Theology of Reinhold Niebuhr*. New York: Charles Scribner's Sons, 1956.
- Kliver, Lonnie. *H. Richard Niebuhr*. Waco, Texas: Word Books, 1977.
- Life* (Fall 1990). Volume 13, number 12.
- Marty, Martin E. Introduction to the Wesleyan Edition of *The Kingdom of God in America*, by H. Richard Niebuhr. Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1988.), xii.
- May, Henry F. *Ideas, Faiths & Feelings: Essays on American Intellectual & Religious History 1952-1982*. New York and Oxford: Oxford University Press, 1983.
- McFaul, Thomas Ray. "A Comparison of the Ethics of H. Richard Niebuhr and Reinhold Niebuhr." Ph. D. diss., Boston University, 1972.
- Morgenthau, Hans. "The Influence of Reinhold Niebuhr in American Political Life and Thought." In *Reinhold Niebuhr: A Prophetic Voice in our Time, Essays in Tribute by Paul Tillich, John C. Bennett and Hans Morgenthau*. Edited by Harold R. Lndon, 97-116. Cambridge: Seabury Press, 1962.
- Niebuhr, H. Richard. *Christ and Culture*. New York: Harper & Row, 1951.
- Niebuhr, H. Richard. "Ernst Troeltsch's Philosophy of Religion." Ph.D. diss., Yale University, 1924.
- Niebuhr, H. Richard. "Ex Libris." *The Christian Century* LXXIX (June 13, 1962): 754.
- Niebuhr, H. Richard. *Radical Monotheism and Western Culture*. With supplementary essays. New York: Harper & Row, 1960.
- Niebuhr, H. Richard. "Reformation: Continuing Imperative." In *How My Mind Has Changed*. Edited with a introduction by Harold E. Fey, 69-80. New York: World Publishing Company, 1960.
- Niebuhr, H. Richard. "The Grace of Doing Nothing." *The Christian Century* (March 23, 1932): 378-380.
- Niebuhr, H. Richard. *The Kingdom of God in America*. New York: Harper & Row, 1937. Reprint, Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1988.
- Niebuhr, H. Ricahrd. *The Meaning of Revelation*. New York: Macmillan Publishing Co., 1941.
- Niebuhr, H. Richard. *Theology, History, and Culture*. Edited by William Stacy Johnson. With a foreword by Richard R. Niebuhr. New Haven and London: Yale University Press, 1996.
- Niebuhr, H. Richard. "The Only Way into the Kingdom of God." *The Christian Century* (April 6, 1932): 447.
- Niebuhr, H. Richard. *The Social Sources of Denominationalism*. New York: Henry Holt and Company, 1929.
- Ｈ・リチャード・ニーバー，柴田史子訳『アメリカ型キリスト教の社会学的起源』ヨルダン社，1984。
- Niebuhr, Reinhold. *Does Civilization Need Religion?: A Study of the Social Resources and Limitations of Religion in Modern Life*. New York: The Macmillan Company, 1927.
- Niebuhr, Reinhold. "Ex Libris." *The Christian Century* LXXIX (May 9, 1962): 601.
- Niebuhr, Reinhold. *Faith and History*. New York: Charles Scribner's Sons, 1949.
- Niebuhr, Reinhold. "Intellectual Autobiography." In *Reinhold Niebuhr: His Religious, Social, and Political Thought*. Edited by Charles W. Kegley, 2d ed., rev. and enl., 3-23. New York: The Pilgrim Press, 1984.
- Niebuhr, Reinhold. *Leaves from the Notebook of a Tamed Cynic*. New York: Willett, Clark, and Company, 1929.
- Niebuhr, Reinhold. "Must We Do Nothing?" *The Christian Century* (March 30, 1932): 415-417.
- Niebuhr, Reinhold. "On Academic Vagabondage." In *Young Reinhold Niebuhr: His Early Writings*. Edited by William G. Chrystal, 145-150. New York: The Pilgrim Press, 1977.
- Niebuhr, Reinhold. *Pious and Secular America*. New York: Charles Scribner's Sons, 1958.

## ニーバー兄弟とアメリカ

- Niebuhr, Reinhold. "Ten Years That Shook My World." *The Christian Century* LVI (April 26, 1939): 542-546.
- Niebuhr, Reinhold. *The Irony of American History*. New York: Charles Scribner's Sons, 1952.
- Niebuhr, Reinhold. *The Nature and Destiny of Man*. Vol. II. New York: Charles Scribner's Sons, 1943.
- Niebuhr, Reinhold. *The World Crisis and American Responsibility*. Collected and edited by Ernest W. Lefever. New York: National Board of Young Men's Christian Associations, 1958. Reprint, Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1974.
- Niebuhr, Reinhold and Alan Heimert. *A Nation So Conceived: Reflections on the History of America from Its Early Visions to Its Present Power*. London: Faber and Faber, 1963.
- ラインホルド・ニーバー, オーテス・ケーリ訳『アメリカ史の皮肉』社会思想研究会出版部, 1954。
- ラインホルド・ニーバー, 大木英夫・深井智朗訳『アメリカ史のアイロニー』聖学院大学出版会, 2002。
- Niebuhr, Ursula M., ed. *Remembering Reinhold Niebuhr: Letters of Reinhold & Ursula M. Niebuhr*. San Francisco: Harper San Francisco, 1991.
- 大木英夫『終末論的考察』中央公論社, 1970。
- Pope, Liston. "H. Richard Niebuhr: A Personal Appreciation." In *Faith and Ethics: The Theology of H. Richard Niebuhr*. Edited by Paul Ramsey, 3-8. New York: Harper & Row, 1957; reprint, Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1977.
- Reinitz, Richard. *Irony and Consciousness: American Historiography and Reinhold Niebuhr's Vision*. London and Toronto: Bucknell University Press, 1980.
- Robertson, D.B. *Reinhold Niebuhr's Works: A Bibliography*. Lanham, MD: University Press of America, 1983.
- Schlesinger, Arthur, Jr. "Reinhold Niebuhr's Role in American Political Thought and Life." In *Reinhold Niebuhr: His Religious, Social, and Political Thought*. Edited by Charles W. Kegley, 2d ed., rev. and enl., 190-222. New York: The Pilgrim Press, 1984.
- Scott, Nathan A., Jr. *Reinhold Niebuhr*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1963.
- Scott, Nathan A., Jr., ed. *The Legacy of Reinhold Niebuhr*. Chicago: The University of Chicago Press, 1975.
- Sifton, Elisabeth. *Das Gelassenheits-Gebet*. Translated by Hartmut von Hentig. München: Carl Hanser Verlag, 2001.
- Stassen, Glen Harold. "The Sovereignty of God in the Theological Ethics of H. Richard Niebuhr." Ph.D. diss., Duke University, 1967.
- Stassen, Glen H., D.M. Yeager, and John Howard Yoder. *Authentic Transformation: A New Vision of Christ and Culture*. Nashville: Abingdon Press, 1996.
- Stone, Ronald H. *Professor Reinhold Niebuhr: A Mentor to the Twentieth Century*. Louisville, Kentucky: Westminster/John Knox Press, 1992.
- Thiemann, Ronald F., ed. *The Legacy of H. Richard Niebuhr*. Minneapolis: Fortress Press, 1991.
- 東方敬信「二人のニーバー」, キリスト教文化学会編『キリスト教と欧米文化』215 - 240頁, ヨルダン社, 1997。
- 東方敬信「歴史と霊性 ニーバー兄弟の論争をめぐって」『日本神学』第24号(1985), 18 - 34頁。
- Troeltsch, Ernst, *Der Historismus und seine Überwindung*. Edited by Friedrich von Hügel. Berlin: Pan Verlag Rolf Heise, 1924.
- Troeltsch, Ernst. *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*. Tübingen: J.C.B. Mohr, 1912.
- Yasukata, Toshimasa. *Ernst Troeltsch: Systematic Theologian of Radical Historicality*. Atlanta: Scholars Press, 1986.